

十四、五年頃よりしばらくは日本畫の全盛となり洋畫は一時全く振はなかつたのである。けれども明治廿七、八年戦役は我國繪畫史の上にかなり大きな影響を與へた。即ち日本が東洋の一小國であるにかゝはらず、世界環視の舞臺に登場する様になつてから排外的な國粹保存説が否定せられて、一時襤子扱にされてゐた洋畫は再び勢を盛り返すことになつた。勿論日本畫は引き続き隆盛であり、日本畫と洋畫の二つが共に相並んで我國の畫壇は、眞に繪畫の全盛を招來し、現今に至つてゐるのである。

これが明治初年よりの初等教育の上にも反映して、小學校に於ける圖畫教育の上に日本畫主義、西洋畫主義の二つの議論がたえず底流してゐるのである。それは特に明治二十年頃より約十五年間にわたつて論争された毛筆畫對鉛筆畫の優劣論であり、其の後新定畫帳が出づるに及んでも、其のふくむ處は毛筆畫のものあり、鉛筆畫のものありと言ふふうで、二つを一つの教科書にまとめたに過ぎない有様であつたから、此の問題は本質的に何らの解決を見ず、其の儘とり残されたかたちであつた。其の後大正時代には自由畫問題の爲に餘り表面には出なかつたのであるが、昭和四、五年頃より、又以前にも増して深い理由のもとに、日本畫に對する問題が擡頭して來たのである。これに對して最も妥當な態度を以て望むことも必要であるが、實際的研究と相俟つて、此の問題の解決の方向をめざすことは、圖畫教育に於ける最も大切な責務であると考へる。

(一) 「小學圖畫」と日本趣味

「小學圖畫」に於ても余程日本畫に對する問題には慎重に取扱つてゐることが窺れるのであつて編纂趣旨の總説に於て

「尋常小學圖畫は現代に適切な美的陶冶をなし、且國民性の涵養に資するため、最も教材の選擇に留意し、又描寫の様式の如きも和洋の別に拘泥することなく、兒童の性能を自由に伸ばすことに力めた。」

とあつて、國民性の涵養と言ふことを考へ、それに關聯して教材の選擇に留意し、描寫方法に於ても、月本畫、洋畫兩方の作品を採用してゐるのである。勿論これには臨畫を望んでゐるものもあるけれども主として鑑賞用として提供してゐるものである。更に用紙は畫洋紙を本體とするが、高學年においては日本紙を用ひさせてもよいとか、用具に墨及び毛筆なども用ひさせるとか、或は教材に於ても前述の様に鑑賞材料として或は臨畫材料として純然たる日本畫形式の繪畫を入れ、又はクレオンを用ひての表現法に日本畫法を導入するとか、更に描寫、表現内容としての教材に日本趣味のものが多く入れてあるとか、かなり國民性の發揮と日本趣味の考慮と言ふことに就いて苦心の跡歴然たるものがあるのである。

(二) 當來日本畫復活の精神

近時日本精神を基調とする考が次第に濃厚となつて來るにつれて、從來繰り返して論議せられたる日本畫に對する問題が、「小學圖畫」に於ても一つの方途を具體化して提供せられ、眞に實際的研究の上にその解決を迫つてゐる根

據は

第一にやはり嘗てなされたと同じく國粹保存の思想に基くものであつて、現代の如く學校教育に於ても一般専門家に於ても西洋畫的表現の繪畫ばかりをやつてゐると遂には、東洋人の産んだ東洋畫、日本人の産んだ日本畫を減す様な事になりはしないか、と言ふのである。事實に於て帝展の出品數なども西洋畫の方がはるかに多く、各種の事由に依る處があるけれども洋畫の筆をとる人は日本畫のそれよりも多いと言ふことは言ひ得られるであらう。最近日本精神の高潮につれ日本畫は國民の間に一層眞面目に考へられる様になつて來てゐるが、でなくとも恐らく日本畫が滅ぶと言ふ様な心配は色々の意味に於て考へられないが、兎に角長い年數の間に日本畫に對する趣味が失ははれないかの懸念である。更に徒らに外來の文化のみに心酔して模倣するだけに止つてゐては、決して一國の文化の向上ははかられない。よろしく自覺めて日本人の長所によつて表現せられ來つた傳統的誇を持つ日本畫に依つて日本の文化の眞價を發揮すべきであると言ふ國粹保存發揮の精神である。

第二は歐洲大戰以後の全世界を支配しつゝあるところの民族主義の思想によるものであつて、前者とは表裏の關係にある民族的自覺である。即ち各民族には夫々民族性がある。然して我が大和民族が其の自然的環境に育まれ長い傳統的歴史を背景として獨特の文化を築きあげ、其の稟質乃至趣味に即した創造が營まれて、日本の文化の發現を見るに至つてゐるのである。しかも我國に於ては美術の中にも特に繪畫に於て實に世界的に異彩を放つてゐるのである。日本民族が外國に多く見出すことの出來ない、或種の材能なり、稟質を持つて築き上げた其の繪畫を忘れてかへ

り見る事さへもせずして、そもそも圖畫教育は正しい道を歩むことが出来るであらうか。古くして若々しい日本民族の文化は、これから華々しい進展を約束せられてゐる前途にあるものである。

第三には日本文化の世界的發展をめざすものである。維新以來文化の攝取に急なりし我國の一切の文化は、殆ど其の模倣に終始してゐた時代があつたけれども、今や西洋主義は没落のの第一歩をはじめ、これにかふるに東洋主義擡頭の曉を感じるのである。これ迄は日本人の獨創による一切の文化がまだ、僅少であつた憾を持つが故に、將來自力で發展して國際地位の向上をはかるべき日本にとつては、其の比類なき歴史と傑出したる國民性に根ざしたる獨特の世界的價値ある文化を保有し創造して行くことが必要である。美術に於ても繪畫に於ても然りである。かゝる意味に於て日本畫の發展を望むものである。

以上の三點は何れも現代の洋畫主義と見られる圖畫教育に於て、もつと日本的な色彩を多分に考へて行くことを要求するものであつて、單に對象を洋畫的に立體的に寫生して能事終り位に考へてゐられないことを深く指摘するものである。

(三) 日本畫對洋畫

1 日本畫と歐洲に於ける繪畫

世界の美術を文化的に尋ねるに、世界の文化の發生地はメソポタミヤ及埃及地方に求められる。然して一は東流

して主として佛教の影響から印度、支那を経て日本に於ける佛教美術の發達となり、一はギリシヤ東ローマを経て歐洲諸國へ發展し、主としてキリスト教の影響を受けて歐洲に於けるキリスト教美術として發達した傾向を見る。此の二つは何れも各民族の文化發達の形式により、前者は東洋畫乃生日本畫となり、後者は西洋畫と呼ばれる様式を産んだのである。

歐洲に於ては最近の十五六年の間に大戰以後の世界觀の相異に基く藝術の推移は多くの派や主義を新興藝術の名の下に於て生滅させたのである。其の一であるシュール、レアリズムの作品が現實を超えた無意識の聯想を喜び、靈感だとか、神祕などが魔術的な表現によつて畫布の上に踊つてゐる様なものを見せてゐる如き、或は其の他のアンデパンダンの考は別として、西洋畫は概して、個人的な立場に於て實感本位に立脚して視覺對照の效果に重きを置き、客觀界を寫實的に説明をする傾向が強い。

これに反して横山大觀氏によつて言はれる如く概して日本畫は東洋精神の傳統に根ざして、高く主觀的な理想から出發し、作者胸臆の世界を不可實的に如實に吐露するものであつて、有形の物象を藉り來つて無形の靈性を創造するものである。即ち物象と其の恵に潜む無形の靈性との渾然一如の相を表現し象徴するのが日本畫の本領である。故に日本畫の道たるやいくらでも發展して窮まる所のない永遠の大道であると言ふことが出来る。歐洲に於ける繪畫が一般に行詰つてゐると噂されるのも、日本畫が盛に歐洲に歡迎される事や、獨逸の新即物主義が新しい精神で物をつかり見つけようとする傾向にあることなどは日本畫に對して面白い對象である。又日本畫の方面からも言へることで

あるが、西洋に於て、東洋の繪畫の手法を研究して洋畫發展の新生面を開かんとする畫家が漸次出るようになってゐることも事實である。

2 日本に於ける日本畫と洋畫

我が國の民族性に立脚し、其の文化の影響を受け、其の自然にがつちりと深い根を下してゐる日本畫は、はかり知れざる程の強い力と貴い價値とを持つてゐる。やはり日本畫はこれを尊重擁護し、更に益々偉大ならしめることは民族として望むべきことである。而して近來日本畫の中に洋畫的手法が多分に這入り込んでゐるものもあり、日本に於ける洋畫の中に日本畫的手法の這入り込んでゐるものもある。これらは眞に融合すべきものであらうかどうか。

松本博士が見られる様に洋畫に對する日本畫家の態度は次の三つであつて將來は第三に最もその發展の確實性があるものと思はれるのである。

第一は洋畫に對する反抗の態度であつて、日本畫には優秀なる特色がある。其特色を發揮させれば立派な美術になる。敢て洋畫の助を借るに及ばないとするもの。

第二は洋畫に追従妥協す態度であつて、時として洋畫の模倣に陥り易い。

第三は洋畫には對し反抗もしない。然りとて親交もしない。洋畫に對する態度を定むる必要を餘り感じない態度。此の態度は洋畫の手法に於て見るべきものありて、自然の觀察による手法として自己のものになつて來れば自らその手法を滲み出させるのであつて、餘り窮屈には洋畫に對して考へないものである。

次に日本の洋畫家に於ても日本畫家が洋畫に對する態度と同様なことが言ひ得られると思はれるけれども、普通洋畫で見られない單純な線の使ひ方、それを構圖法や色彩法の中につちりと力強くとり入れて一家をつくりあげてゐるものもある。併し何と言つても現在の洋畫家の總てが最もなやみとしてゐるところのものは洋畫の表現用具を用ひて、如何にすれば日本人としての繪が描けるか。日本的な味を如何にして表現すべきであるかとの問題であるらしいことは誠にたのもしくも力強い極みである。

こゝに於て日本人の描く洋畫は全く西洋流その儘の考へ方を表現するものは別として、ひとしく日本畫と云はず洋畫と云はず、吾々に日本民族が今日日本精神を宣揚し、日本文化の向上を希つて日本人が本當に持つべき文化が如何なるものであるかと云ふ事を大いに考へて、繪畫の上にこれを實現せんと希求するならば、洋畫風の用具材料によつても其の目的は達せられるのである。故に從來の日本畫の用具材料を用ひることのみが日本精神の表現となるのみならず、洋畫の用具材料を用ひることが日本の民族性を表現しないと云ふことにはならないのであつて、結局用具材料に依つて日本畫或は洋畫の區別をすることは出来ないことになる。即ち表現内容の如何、魂の如何が問題となつてこの區別を規定するものであるから、嚴密に云へば日本人の魂を持つて描いた繪畫は、其の用具、材料、手法の如何を問はず單に外面的な形式によつて、日本畫、洋畫の名稱を與へることはあたつてゐないことになるのである。

繪畫の本質的な内容が我が民族性を多分に持つてゐるならば表現形式の如何に係らず眞の日本的な價值ある繪畫として推賞すべきである。只注意すべきは從來の日本の造形文化にのみ浸つて他を顧みない時は、其の文化は化石とな

つて發達を阻害せられ、又外國のものにのみ心酔する時は久しい間に築いて來た自國の造形文化を全く破壊し、寧ろ滅亡させてしまふことになるから、本質的に考へて大いに持續させ發展させるべき部面と更に改善を加へて新生面を開くべき部面とを考へることが必要である。然して日本民族の生活上最も貴重にして、而も民族生活の向上に貢獻すべき意義あるものを生み出すことに精進すべきである。

(四) 實際上の諸問題

圖畫教育に於ても日本精神に立脚する魂の修養が最も重要な點であつて、從來の日本畫を直ちにそのまゝ圖畫教育に導入して日本的文化創造の實現を期すると考へることは寧ろ早計である。即ち形式主義に墮することなく内容本位で進むべきである。用具材料に囚はれず描畫上の手段方法を絶對に自由なるものとして、其の内容本質の上に日本人としての獨特の民族性の香高いものが生れる様に指導して行きたいものである。兒童はよき日本人へとして現代及び將來に向つて世界的に活躍しなければならぬ日本人である。輝く日本魂を忘れてはならぬが又古來に固執することなく現代的な歩みを続けねばならぬ。故に日本畫であるとか、西洋畫であるとかの専門的な繪畫藝術より異つたもつと廣い意味に於て、國民教育の美に關する基礎的教養の不斷の學習をしなければならぬのである。

1 題材に關するもの

圖畫科に於ける其の題材を如何に選擇し如何に配列するかの問題は常に其の最初に當つて考へねばならぬことであ

るが、それには思想畫、寫生畫、圖案、用器畫等の描寫表現から鑑賞方面のことまでよく調和配合した指導體系の骨組がしつかりと出来上らなくてはならぬ。而して之の肉づけとしての血液を通はせる爲に最も適切なる教材を選ぶのである。(當校研究叢書第七輯「造形美育の指導體系」参照)

此の教材として選ぶ題材に就いては、兒童の生活が中心となるものでなければならぬが、兒童が今日生活する複雑な郷土は、日本特有な風景の中に、古來傳統的な風俗、習慣による典雅な生活の一面と、近代文化の複雑なる世相との物的表現とが混然として日々擴張されつゝあるのである。故に兒童の學習教材が偏狹な一面に限られる様なことなく、廣く現實の中に題材を求めると同時に傳統的な題材によつて心を養ふことを忘れてはならない。

即ち日本精神の涵養に最も適當なものを、日本的な生活の中に見出して行くことである。これがとりもなほさず、日本の文化創造の最も有力な一方途である。日本的な生活、それは家庭生活、學校生活、社會生活の何れの上にも精神的な方面と造形的な即ち物的な方面とが對象として見られるのである。これらを對象とする時我民族が長い間に築き上げて來た精神生活と物的生活とに、深い親しみを持つて來る様になり、民族的精神は次第に體認せられて行くことが出来る。而してその表現には當然日本人としての表現の形式が生れて來るものであると考へる。

例へば思想畫に就いて考へるならば、祝祭日に國旗を掲揚せる家、郷土の田園に働く村人が特有の服裝をしてゐること、日本古來の民族的な行事である。雑祭り、七夕祭り、正月の景物、氏神の祭のなつかしさ、五月陽春の空に躍る鯉職など兒童の生活に離るゝことの出来ないものであり、日本童話の繪畫的表現は知らず／＼の間に兒童の純な心

を養つて行く。更に日の丸をつけた飛行機、兒童の憧れの對象である軍人、戦争などの繪を描くことによつて、日本魂は培はれ世界的な日本の將來への希望は躍動するのである。

寫生にしても靜物に於て兒童の生活には卑近でない、洋酒瓶や殆どマンネリズムに取扱れてゐる題材ばかりに偏することなく彼らの日常接する生活範圍から材料をとることが肝要である。又風景寫生にしても樹木の間に見せる古社寺の特有な建物、鳥居山門などを描くことは表現能力や美的陶冶の外には兒童の心を養ふ何物かを感じる。と同時に兒童の生活内容である洋館の建築其の他の機械等の近代美も勿論忘るることは出来ない。特に自然美は今日の日本人をつくり上げて來た貴い我等の國土であつて、美はしい日本精神とその藝術の練成の上に少からざる貢獻をして來た美の國日本の自然である。これを充分に大切にすることも甚だ肝要なことである。

圖案に於ても日本趣味を生かすことが大切であるが、日本的な新圖案をめざして進むべきで、日本趣味にとち籠ることなく、日本人獨特の天分を伸ばすと同時に、廣く世界各國の趣味にも通ふ様なものでありたい。

鑑賞教材にては、單に所謂日本畫、洋畫の繪畫史的な材料に限らず、廣く日常生活に於ける土瓶、碗、等から出發して衣食住の總べてに、新日本の進むべき生活、世界的な日本人としての鑑賞能力を深め、かゝる鑑賞力が美的實生活に強く働く様でありたいものである。

要するに題材の選擇には今日の複雑なる現代世相の中に根ざす傳統的な日本精神を根柢として近代文化の中に生きる兒童の現代及び將來に缺けることのない美的陶冶の實現をめざすべきである。

2 用具材料に關するもの

新しい日本の圖畫教育を考へて行く時に、用具材料は、その根本的のもので無いことを前述したのであるが、それが全然無價値たることは出来ない。繪畫的な表現には、最も適切な畫布、畫筆、繪具とそれに關聯して當然技法上の工夫が相當重要な役目を持つものであるからである。併し普通教育に於ては云ふ迄もなく純粹藝術に於ける如き重要さはないのである。

それはクレヨン、鉛筆、水繪具類、畫紙に對して、毛筆、墨、日本繪具、絹地、畫箋紙、唐紙などをあげる事が出来る。毛筆を使つて墨繪を描かせることは内容本質論から見ても、日本趣味の繪を描かせる爲の有力な助けとなる。日本紙に毛筆で繪を描くことは古來より日本の繪畫に於ける重要な技法であるが、國民教育に於ける圖畫教育に於ては、他のクレヨン、パステル、水繪具、鉛筆等と同じ様に學習用具の一として考へ、何れも特質に應じて使用せしめる程度でよいと思ふ。もともと毛筆をもつてする日本畫の自然人文に對する態度は、洋畫のそれに比して、美意識の未だ發達階梯にある幼稚な一般兒童には味ふ事の出来ない境地が餘りに高いので、前述の通り決して日本畫の教習をするのでなくして、毛筆を採用する場合のあることに依つて日本趣味的な色彩を導入する所に意義を認めるのである。又水墨繪は美術史的に考へてもわかる様に一躍して生れたものでなくして、自然の中の色彩、形狀、明暗、質量のすべてが十分咀嚼され消化されて後生れ出る高尚な藝術であるから、毛筆習字の用筆運筆を教へる様には簡單に指導出来ないが、これを採用する場合の其の手法は一つの型に倣つた窮窟な古い日本畫風のものまねることなく、も

つと自由にのび／＼と驅使すべきである。

純粹的な墨繪に迄の指導は餘程むつかしいのであるが、高學年に進むに従ひ鑑賞と共に其の味が幾分でも分れば効果のあることである。それは例へば花をモデルとする場合、洋畫風に於ては物の存在的實在を表すのであつて、見る者はきまつた位置より花の定位置を存在する美しさを表現するのであるから、花の明暗遠近の立體的な表現を必要とするに反し、墨繪の行く處はモデルの瞬間的な存在の美しさでなく永遠なる姿に於ける花そのもの、美的表現であるから立體的、或は定位置と云ふ様なことは問題ではなくなる。洋畫風が色と面とによつて表現しようとする時、後者は線描きを主要とする表現である。故に線による表現、明暗をつけない表現による氣持などを味はせることが有意義なことになるのである。しかし此の際特に注意すべきことは、洋畫風の寫生表現と日本畫的の表現法とが並んで進み或時は明暗遠近と或時は線のみによる、此の二元を強ひることにならない様に、又兒童をして其の迷路に立たせる様なことのない様にありたいものである。

(五) 指導者の修養

日本の文化創造の發揚をめざす圖畫教育が今日不可欠の意義を有することは上述せる通であるが、これに對しては指導者たる者の修養が更に重要な要素となつてくる。所謂洋畫、日本畫たるものばかりなく、近代の新興美術に於ても、或は美術史的な繪畫に於ても精通してゐることが肝要であつて、現代の日本畫は云ふ迄もなく、特に我國の過

去の藝術にも充分の理解と尊敬とを持ち、日常接する兒童の思想感情並びに彼等の描寫表現する作品に就いて、日本文化の上より常に見守つて行くことが緊要なことであることを承知すべきである。

更に最も大切なことは如何に日本趣味的な方面に導くとしても、日本精神を基調とする魂の教養に不十分な點があるならば、それは無意味なことになる。然も云ふところの日本趣味は小さく從來の我が民族の趣味にのみ止つてゐることを意味しない。我が民族は今や世界に於ける最高の造形文化を築かなくてはならぬ使命を有するものと言ふも敢て過言ではないとの自覺を持すべきである。

第四章 美術工藝の基礎的教養をめざす圖畫教育

近時、美術の産業化は世界の潮流として急激に進展し、従つて實用美術の社會的存在は、今日茲に、新らしき意識を以つて更生し、美術の一分野を確立するに至つたのである。更に最近深刻に襲ひつゝある世界的經濟上のパニックは必然的に各國に於ける實用美術の向上を促して止まないものである。故に一國の文化發達は、其の國の産業工藝を見れば一目にして知る事が出来るようになって來た。即ち産業工藝乃至美術工藝は直接間接に平和の戰器と言ふことが出来る。かゝる時代的狀態に於て圖畫教育は美術工藝の基礎的教養をめざすことに其の重點を置くべきは蓋し火を見るよりも明らかなる問題である。

(一) 美術工藝の基礎的教養としての圖案

産業立國論に對しても産業工藝が常に叫ばれてゐるのであるが、産業の生れる根本に深い關係を持つものに意匠圖案の必要がある。然して圖案は工藝の母である。工藝を普通二つに分けて美術工藝と一般工藝とに考へるのであるが何れも圖案に依つて生れるのである。而して美術工藝は一般工藝を指導する關係にある物とも考へられるのである。故に美術工藝の基礎的教養として、圖畫教育は重大なる責任を持つ物である。即ち一般人が圖案に對する高い趣味を持つならば其の必然的の歸結として、優れた美術工藝品が要求せられ、其の要求は其の社會に優秀な美術工藝品を生み出す母體となるばかりで無く、すべての生産せられる實用品の上にも美的効果のあるものが、眞の實用品として市場に歡迎せられることと言ふ迄もない。然して文化の教養の高い國民ほど此の要求が強くなるのは歴史の示す處である。此處に圖案教育が國家の經濟とも密接なる關係を持つて來るのであつて、澎湃として擡頭しつゝある實用教育とも深い意味に於て握手するのである。

これは彼の普佛戰爭に敗れて經濟的にも非常に苦難に陥つた佛國が美術工藝の發達を一つの大きな理由として更生した歴史の證明する所である。

(二) 日本的美術工藝の基礎的教養としての圖案

圖案の言葉が多の場合に非常に狭く考へられてゐるやうであるが、圖案と言ふものは實生活の一切のものに表現せられてゐるのである。即ち人間生活の衣食住の何れからも圖案をとり去ることは出来ない。然して衣食住は工藝に他ならないのであるから工藝のない衣食住は考へられないのである。又工藝で作られるものは、とりもなほさず意匠である設計書に基づいてゐるのであるから、意匠圖案の設計なしに工藝は組成されないと云ふことになる（これは前項に述べるべきを都合上こゝに圖案と工藝の關係を明かにしたのである。）

扱つてこゝに圖案の意義を明らかにする迄もなく、今日百貨店の幾萬の商品の動きを見る時、そしてそれが日々刻々と移り行く日本の意匠圖案の姿であるを思ふ時に、過去幾千年の歴史から現在に押し出して來たところの内容の形式化にもつと日本的な創意性が滲み出て然るべきであると思ふ。最近民族意識に燃えて來た我國は此の方面にも世界に對して創意の表現を示すべきである。其の創意性から構成せられた圖案が國際的にも國內的にも權威ある生産力を高揚することになるのである。

翻つて歴史を見る迄もなく光悦や光淋の世界に冠絶した仕事や宇治の平等院或は大衆的なものとしての日本人の紋所等々の如く日本の圖案及び工藝ほど独自の立場に於て立派な發達をして來てゐるものはないのである。従つて圖案や工藝に對する民族的國民的見方は又独自のものがあつたに、かゝはらず、今日の圖案と工藝に獨特の味の出る濃度の薄いのは、深く國家的民族的に反省をする必要がある。遠く史前の日本民族の圖案と工藝にも日本民族の特色が現はされてゐるのである。

(三) 實際指導上の問題

以上は現代に於て最も大切な美術工藝の基礎的教養としての圖案を見て來たのであるが、圖案教育の大切な理由はまだ他にもあるのである。然して圖案教育の實際指導ほど今日數多くの問題を投げかけてゐるものは此處に記す餘白を持たないから詳細は當校研究叢書第七輯造形美育の指導體素に就いて御覽を乞ふとして一二特に注意すべきであると思ふ點を指摘するに止める。

1 眞實なる自然觀照

由來日本人は自然から離れて生活することの絶対に出来なかつた民族であるらしい。それだけに變化に富んだ生活様式を持つてゐるのである。例へば料理に使ふ食器にしても器物の變化から盛り方、その陳列の仕方配置、配色、形態の配合等々に到る迄眼で味ひ、手で味ひ、それから舌鼓を打つと云ふ譯であるから、西洋風の劃一的なものとは趣を異にしてゐる。或は各自の分によつて庭を持ち庭と家とを別なものとして離すことはしないのである。常に自然の姿形を生かしてゐるものには、自然が最高の良教師となるのであらう。今日の日本が圖案に對して躍進を期するならば、國民的の歴史を見直し、その民族を知り、自然に對して眞實な見方をしなければならぬ。自然と人生と自然と工藝と、そこから出發して、そこに終るのが民族日本の藝術の特質である。

2 新しい様式に動く美と圖案

今世界は著しい進展に向つて動いてゐる。「今や素晴らしい時代が始まつた處だ。新しい精神が漲つてゐる。」とはフランスの精鋭なる建築家コルビュジエの颯爽たる言葉である。藝術である以上新しいと云ふことのかけてゐるものは既に價值がないのである。即ち創作でなければならぬ。凡ゆる方面に眼を開いて優れたものを探り入れ、新しい日本の圖案の構成に努めなければならぬ。それは單に歐米の模倣であつてはならないし、單に從來の日本のものゝみであつてもならない。

更に今日の社會生活様式は一番前のものからは全然一新してゐる。此の擴充された生活様式に應ずる工藝の用途と範圍との増大はまた言ふ迄もなく昔日の比ではない。其の需要に應ずる爲にはどうしても新しい研究が必要である。

現代の要求する新しい精神と見られるもの一つは、物の實用に向つての目的に材料と表現方法とを集中して、意匠を高唱することである。即ち見易い形式上の特色としては簡明直截である事である。簡明なる構圖に於ては當然「力」が要求される。力のない簡明は徒らに單調である。時代感情も又力を必要とする。力は美である。單なる優美は既に薄弱な美として退行しつゝあるかの様である。但し力と云つても決して暴力的なものではない。充實さ、物に漲るヴオリウムエネルギー等から感ずる美である。

例へば新しい飛行機の颯爽たる風貌であるとか、快速自動車の精銳な姿態が放散する力であるとか、軍艦、タンク、橋梁、ピュルディング、機關車等が表現する所の冷徹直截な構成美であるとか、これらが明らかに尖銳な近代感覺の一つを占めるものである。即ち新しい圖案の風貌は端的簡明充溢直截なことである。更に之に加ふるに明朗なる

表情をもつてする。効用は美なり、實用は即美である。一切の冗漫をすて、不必要を除き効用の最大限を發揮したものの、そこには當然、かけがへのない充實があり、動くところのない美があると見るのである。これは單なる一つの見方であるが今や日本は世界の日本として、日本民族の趣味と、更に他の凡ゆる民族のもつ趣味をも抱括し得る様な偉大な豊富なる深い趣味を理想とすべきであると考へる。

手工教育の根本精神

第一章 現代日本の姿と手工教育

我國は極東の一角に偏在し、且つ永く鎖國の方針を探り來つたが爲めに泰西文化に接すること少く、太平の夢を貪り續けて來たのであるが、一朝明治維新に際會するや泰西文化の追隨に忙はしく、ことに科學文明の攝取に急にして模倣をこととし、先進國よりは模倣模擬に長ずる國民なりと稱えられ、國民自らも亦しか信ずるに至つたのである。しかし勃興民族が勃興途上の最初の段階に於いて、かく模倣模擬に墮することは自然の傾向であり、また趨勢であると云はなければならぬ。かくて明治・大正・昭和の僅々六十年、この間に於ける急激なる日本文化の發展は世界の奇蹟とまで驚歎されるに至つたのである。而してこの急激なる發展は單なる模倣にあらずして、悠久三千年營々築き來りたる文化的基礎があつたからである。即ち總らゆる外來文化を攝取し新しく、日本の所産として生み出し來りたる結果であり、この確乎たる礎石の上に今日の燦然たる日本文化が建設されたのである。この礎石たるや有史以來幾度か非常時の難關を突破し少しの搖ぎもなく、却つて益々その強固の度を加へ來つたものであることは國史の物語る所である、而してその中核をなすものは我民族の血潮の中に躍動する偉大なる日本精神である。この精神あるが爲めに幾度か迷路に彷徨しつゝもやがて國民的自覺の本道に立ち歸へり今日の盛運を迎へたのである。

嘗ては未開國日本の先達として其の知を授けその技を教へその啓蒙に力を注ぎ、日本の興隆に對しては其の勞を齊

まなかつた泰西先進國も我國の隆々たる發展に伴ひ一大競争相手として驚畏を感じしめるに至つた。而してこの世界的驚畏は遂に總ゆる壓迫の方策として現れ、遂に非常時局の再會となり、再び試練の時が來たのである。加ふるに我國は領土狭小にして資源に乏しく、加ふるに人口の増加急激にして國民生活の窮乏は年と共に加はり、内に思想の惡化もなしとせず内外共に多事多端、こゝに於いて非常時と云ひ、國難と稱し危機と叫ぶ。人によりその解する所同一ではないが、何等かの或る動搖が迫りつゝあるかの豫感を與へつゝある。果してそれは單なる杞憂であらうか、取越し苦勞であらうか。しかし非常時實體の出現は日々に吾人の目前に展開されつゝあるではないか。而してかうした非常時は一時的現象ではなく、その姿こそ變れ今後の國際場裡には益々その度を高め來ることを覺悟しなければならぬ。こゝに於いてこの不安を一掃し躍進日本を守り生々發展せしめる基礎は多々あるであらうが主として經濟力の充實にあると思ふ。而して我國の如き領土狭小、人口過多の國に於ける經濟力の充實は工業の發展に俟たなければならぬことは論ずるまでもないことである。工業の發展は科學的知識と實行力に富める創造的國民を必要とし、且つ國家的全體觀に立つての運營たることを要望されるのである。即ち將來の國際場裡は知能と知能との競争であり、組織と組織との闘争であり、やがて勝利の榮冠は創意と組織を有する國に與へられるであらう。この國民的自覺に立つての生ける知識の獲得と實行力の啓培及び創造力の育成は一つに手工教育の重責であり使命である。この重責を全うしこの理想の實現を期する爲めには國民教育としての手工教育は如何なる根本精神に立脚し、如何なる方途を講ずべきかの究明が必要である。以下その解明を試みたい。

第二章 手工教育の根本精神

手工教育は主として製作體驗を通しての教育であり、その内容に於いては自然と人事に關する各般に渡る知識を與へるものであるが單なる知識、單なる概念としての受容ではなく、製作に對する必然の要求としての知識の受容であり、直ちに實踐への流動性に富める生ける知識である。また製作に於ける技術も社會各般に渡る技術を當然の歸結として修得することであり、兒童今後の社會生活に於ける必須なる技術である。今後文化の發達と共に吾人に與へられる科學的機械機具の處理上この知識と技術は益々その必要が痛感されるものである。而して製作は單な物品製作を意味するものではなくして常に生々發展を意味する創造性を念願するものであり、更新性を持つ製作である。この製作に精進することによつて創造的國民が育成され我國の躍進も志向されるのである。また製作はその結果として作品が生産される。この日々に完成され生産され行く作品は、それが兒童の生活必需品であると、家庭用品であると又は學校用具であるを問はず大にしては國產の増加であり、國富の一片鱗である。作品の完成は兒童一人の喜びであると共に國家に對する責務であり、作品は如何に微なりと雖も國家經濟を織りなす一糸であることを思ふ時自ら國民的自覺が養はれるのである。そこに工業の趣味は養はれ生産に對する興味は培はれるのである。またその製作は材料に機械工具を以て加工することであり、材料そのものは大自然の恵みに浴して成れるものであり、機械工具は歴史的發達を

遂げて今日に至つたものであり、同胞の力に依つて作られ吾人に與へられたることを思ふ時自然に對する敬虔の念が自ら湧き出づることであり、先人に對する感謝、同胞に對す感謝同情の念が當然生れ来る筈である。しかもその獲得が耳を通しての獲得でなく製作體驗を通しての獲得である所に一層の強みがある。即ち主觀が冷やかに客觀に觸れた丈けのことではなく、客觀が主觀に抱擁せられ、主觀が客觀に熔融されたる聖なる境地である。故にそこには何等かの永續的な痕跡を生命に宿すことであり、且つ發展への實行力が與へられるのである。子供の内的世界へのこの共鳴はやがて經濟の倫理化も豫想され、目的價值としての勞働が生れ、創造的國民たり得るのである。

而してその製作は他から強ひられるものでなく兒童の止むに止まれぬ慾求であり、作品の完成を他にしても製作そのことが既に兒童の大なる喜びである。また作るそのことが實驗の爲めの作業でもなれば證明の爲めの製作でもない製作そのことが目的であり、生活であり實社會への連續である。曲尺を以て板の長さを計る或は鋸を以て板を切ることも作品完成への創造的連續の一斷面であつて、單に計る、鋸斷すると云ふことではない。その些細な作業も目的に向つての一步であり、この一斷面にもその製作に對する一貫せる精神が流動して居るのである。また作業中に於ては別に指導することなくとも自ら相互補助は行はれ、互に教へられ勵まされ助けられつゝ製作は進展するのである。故に手工教室は平和なる一社會を形成し、喜びと潤ひの中に浸る兒童は無意識の中に自ら道徳が實踐されて行くのである。即ち冥々の中に行はれる修身教育でもある。

要するに吾人の目指す所は製作の奥に秘められたる香りであり嘔きであり情緒の姿である。この香りこの嘔きに接

することに依つて聖なる境地に參入せしめやうとするのである。故に眞の手工教育は教ふ或は學ぶといふ様な對立からは生れ来るものではなくてむしろ對立を超越した同行の行者としての行の生活でなければならぬ。この聖なる境地に浸つてこそ眞の指導が實現されるのである。手工教育もこの領域に到達して始めて個人としての發展と幸福は望まれ、國家の發展は期せられ躍進日本の要望する教育たり得るのである。

以下これを各節に於いて詳述することとする。

(一) 製作の味ひと實行力の啓培

子供の自然性は筋肉的活動を本能的に欲求するものであり、作品を他にしても製作そのものに既に大きな喜びを感じるものである。ましてその製作が兒童の熱望する作品構成を目標とする製作であつた時、作品そのものゝ次第に完成され行く妙味に云ひ知れぬ喜びを滿喫し得るのである。しかもその作品が完成された時の喜びは作者のみの味ひ得る無限の妙味であつて、他の洞察し得ざる所である。故に製作過程に於ける汗の勞働は苦しみの勞働にあらずして楽しみみの勞働であり、汗は喜びの表現であるとも云ひ得る。而してその作品を自己の物として或は家庭の用具として日常使用する時、如何にその作品は貧しくとも一種の懐しさを感じずには居られない。かつて教へたることのある一青年に久方振りに會つた時、最初の言葉として「先生に教へて貰つて作りました煙草盆は今も尙ほ使つて居ります、買つた物には味がありません」と云つた。卒業以來十數年、しかも富有なる家庭の主としてこの言葉のあるは不思議

と云へば不思議であるが、この青年の言葉は製作の眞の味を體驗したるものには充分に味ひ得る所である。製作を通して得たるこの味覺。それは單なる喜び一時の感激として終るものではない。やがてこの味覺は發展的因子として内在し、機會を與へられることによつて顯現し發展して止まないものである。

また一面かうした作品完成への喜びの過程に於いては材料機械工具工作法等の中に豊かに盛られたる自然と人事の歴史的發達と自然界への洞察が加へられるのである。こゝに於いて作品は先人の恩恵と自然の潤ひに浴して成れるものであることが體得される。而してこの體驗はやがて材料、機械工具へ一種の親しみと尊敬がはらはれ、工作法を通して自然の力に感じ、自ら先人を敬し自然を愛し、打つ一本の釘にも意味なくして打つことは出来ない。かうした境地に入つては不知不識の中に總べてを人格化し神化されるのである。かの我國に於いて行はれる元旦の行事を見るに門松を立て七五三を飾り、神を祀ると共に農家は農具を工人はその機械工具を各々清掃し、これに七五三飾をする習慣がある。これは過ぎにし一年の勞苦に感謝を捧げると共に本年の希望を念願する心であらう。また年頭の街路を疾驅する自動車、自轉車にも七五三飾の見らるゝは我民族精神の床しき一つの現れではないか。かうした温かき精神に充されてこそ農作物の豊饒と作品の優秀さが伺はれるのである。

而してかく人格化され神化されることは、他から與へられたるものではなくして製作體驗を通して無限の喜びの中に生れ出でたる敬虔の念の發露である。この内面的感傷のある所に具體的な文化の創造がある。要するに製作は喜びに出發して感謝、敬虔へと發展し、三昧境に浸るものであつて、それと同時に躍進日本の要望する發展的意志の強

固なる實行力に富める國民たり得るのである。

(二) 實行性に富める創造的國民の育成

我々現代人が文化生活を營み得るその恩恵の源をなす要素は多々あるであらうが、特に物質文明の恩恵に浴することは多大である。若し現在生活から物質文明を取り去つたとしたら、その惨めさは想像にあまりあるであらう。震災により風水害により一時的にその一部分を除去されたのみでも如何に困窮したかゞしみんと味はれる所である。これに依つて見ても考案發明による恩恵の如何に多大であるかゞ伺はれ、又一面考案發明が如何に國家社會に影響するものであるかゞ知られるのである。故に國民生活の向上は全くこの考案發明によつて達せられるとも云ひ得るのである。今後の躍進的世界に於いては相對的にその進歩の多少によつて優劣が決定されるのであり、我國が他國よりも相對的に多少でも考案發明に一日の長ある時に始めて優越なる地歩が與へられるのである。我國は先進國より模倣に長ずる國民なりと賞讃せられた時代は既に過ぎて、今日は世界を驚倒するに足る考案發明が續々生れ來つた結果、現時の如き世界の嫌まれ兒としての優位が占められたのである。特許法制定以來僅々五十年にして特許出願數は世界の第三位を占め、その質に於いても世界的發明が多いと云ふことである。誠に慶賀の至りではないか。しかし前に述べたる通り躍進的世界は一時も躍進を停止するものではない。互に相對的關係にあるものであるから今後は發明考案を益々盛んにし、その量に於いても質に於いても優位を占めなければならぬ。而してその考案發明たるや一つは科學の

進歩發達がその基礎をなすものであり、今一つは耐えてたゆまない實力である。故に國民教育に於いては知育の重視と實行性に富める創造力の育成が最も肝要である。現時の教育は偏知教育であると唱へられつゝあることは知育の輕視にあらずして、その實行性の不足を憂ふるものである。而して手工教育に於いては知的には現代文化の理解を主としやがて進むべき動向を伺はしめ、製作體驗を通して實行性に富める創造力を養ふにある。故に手工科は從來の偏知教育を是正する唯一の教科であるとも云ひ得る。

以上の重大任務を擔ふ手工教育に於いては今後一層創造力の育成に努力しなければならぬ。即ち製作に更新性を重視すると共に材料に於いても機械工具に於いても現在の材料機械工具を理解せしめるに止まらず進んで將來への發展に一石を投じ創造への動向を與へて置くことに留意しなければならぬ。而してその創造は單なる改造工夫に止まらず自然界の靈氣に觸れしめ、敬虔なる態度と謙虛なる心持によつて神の祕庫を靜かに探ることとなければならぬ。こゝに於いて吾人は創造は神の御心に添ひ奉らんとする念願であると云ひたいのである。この聖なる心持によつてこそ創造への第一歩が踏み出せるのであり、實行力も喚起されるのである。子供の世界に於ける創造は國家社會に直接貢獻し得る程度のもは望まれないが、實際的な製作體驗を通してその態度と實行性が確實に附與されるのである。これがやがて考案發明の根底となり創造的國民たり得るのである。

尙講話によつて特許制度を通して國家の保護獎勵の意のある所を十分に伺はしめ、且つ帝國發明協會の事業の一般にも觸れ發明家保護の實際を知らしめ、尙近年發明家を優遇し賜ふ聖旨の程も拜察せしめ、進んでは廣く内外の主な

る發明家の事蹟を知らしめることによつてその堅忍不拔の精神に感銘せしめなければならぬ。こゝに於いて考案發明の國家的意義が明確に把握せられ、創造體驗と相俟つて實行性に富める創造的國民は育成されるのである。

(三) 實際的生産による經濟觀念の育成と生産に對する趣味の涵養

現代の國民教育を反省する時一般に抽象に墮し生産への教育が輕視されて居るかの觀がある。これ明治初期以後に於ける歐米文化の追隨に急にして特に新知識の獲得に専念した結果であらうが、今日の如き世界の日本として否やがて世界人類の指導的地位に立たんとする躍精日本の將來を考察する時、その經濟的實力を養ふことは最も重要なことであり國民教育に於いてもその一重點としなければならぬことは論ずるまでもないことである。

而して我國の如き狭小なる領土と人口の稠密を以てする國に於いては工業の發展による世界的進出を必要とするとは自然の進路であると思ふ。しかも我國は工業國としての本質的要素たる國民の手先の器用と科學に對する能力の優秀さがあり、加ふるに無盡藏の資源を有するアジア大陸は同時に市場として近くにあり、彼の尨大なるアメリカは我市場であり、また自國を顧れば土地狭小なりと雖も尙科學の力によつて開拓すべき資源も少なからず、且つ廣大なる海洋は豊富なる資源を包藏して居る。この好條件に恵まれたる我國は世界一の工業國としての發展が十分に豫想され得るのである。而して一國工業の發展は一、國家の保護獎勵。二、工業教育の振興。三、當業者の奮闘努力この三つによつてその目的が達せられるのである。手工教育は製作體驗を通してこの教育であるから工業的材料を使用し工作

機械を以て加工し作品を生産することは云ふまでもない。故に當然二及び三の振興に寄與するものであり、本科教育の重要分野である。

工業發展を目標とする工業教育は各種の専門の學校に於いて行はれることではあるが國民一般の工業常識の水平線を一段と高めることが國民教育の重大使命であり、この國民の工業常識の發展によつて一國工業の發展が可能なのである。一代の名匠を産み世界を驚倒するに足る發明發見の生れ出づるも、多くはその時代その社會が必然的に産み出したものであることは古今の歴史がこれを明かに物語つて居る。工業の隆昌を念願するならば宜しく名匠を生み、發明發見家を續出する社會を作らなければならぬ。こゝに國民教育上工業教育の重要性がある。尙各國工業の發展は年と共に躍進して停止する所を知らず、今日の先進國は明日の後退國であるかも知れない。即ち一步々々生々發展することなければ世界に雄飛することは出来ない。こゝにも躍進日本を擔ふて立つ第二の國民を作る國民教育上工業教育がその一重點となつて來るのである。

以上の念願の上に立つ手工教育は一部の人によつて唱へられる様な古典的製作を通しては現代文化を理解し、進んでは世界を指導せんとする躍進日本の工業的發展は望まれない。宜しく世界の活舞臺からその材料を探り、國民の生命力を養ひ氣魄を培ふべきである。徒らに過去の憧憬に終るならば、それは兒童の生命を養ふ所以ではない。過去の憧憬は現實の生命を動かさやがて將來への發展の機縁たることを豫想されなければならぬ。故に今後の手工教育に於いては現代文化を理解し、進んでは將來への發展を念願しての教育でなければならぬ。而して製作は單なる作品の生

産に終始することなく、そこに生命を把握することではなければならぬ。即ち一片の材料もその生命を認め國家的見地より之れを扱ひ、一個の機械工具にもその生命に觸れしめると共に國家的見地より有効に使用する様導かなければならぬ。また作品の完成は生産を意味するものであり、一個の作品の完成も國家的見地よりすれば國産の増加であり、國富の増加であることの喜びを味はしめなければならぬ。第一節に述べたる通り製作そのものにさへ無限の喜びを味ひ得るに作品の完成はやがて國富の増加であることを思ふ時更に大なる喜びが味はれるではないか。これを牽強附會といふものあらばそれは教育者としての信念の不足である。一步進めて云へば作品を完成し得たることは自然の力であり、神の助けによるものであると云ふ信仰的信念が教育者の心持の中に流動して居らなければならぬ。こゝに眞の經濟的觀念が自ら養はれるのである。換言すれば一椀の御飯もいたゞいて食ふ心境である。

また一面現代の經濟組織より見るに舊來の資本主義的經濟は個人の利己心の行くがまゝに最大限の生産が實現されたのであるが、これは確かに資本主義的經濟の長所であると共に短所であることは否定し得ない。而してその發展の終局は遂に今日の世界的不況の將來となり資本主義的經濟の破綻を來したのである。こゝに於いて修正資本主義經濟は生れ、國家意志を主位に個人意志を従としなければならぬこととなつたのである。即ち國家意志と個人意志の一致が要求されることとなつた。従つて修正資本主義經濟の要求は常に道徳的であり倫理的である。個人の經濟活動に倫理性を要求する修正資本主義は國家の意志を意志として働く日本固有の愛國的民族精神によつて發動せんことを求めて居るのである。この強い國民的自覺に立つてこそ日本の修正資本主義的經濟が生れて來るのである。かうした經濟

生活の倫理性は國民的自覺に立つ手工教育に於いてその根底が基礎付けられるのである。以上の見地に立つ手工教育に於ける實際的生産活動は自然の歸結として工業に對する趣味は培はれ、生産への興味と意力が養はれるのである。

(四) 勞作體驗を通しての勞働の聖化

子供の生活に於ける筋肉的活動は心身發達の上に缺くべからざる契機であり、その活動は子供の自然性より流出する盡きざる活動である。子供はこの活動によつて自然を理解し自然を生命づけ自然を神化し、かくして人格陶冶への第一歩が築かれるのである。これを古代人の原始的な生活について見れば彼れ等は何等の具案的な教育とはなく、日常の生活々動の中に經驗を重ね、その經驗は認識となり凡ての行動の原動力となつたのである。そこには人倫の道は體得せられ敬虔の念は培はれたのである。而して我民族精神はこの實踐性によつて自ら發達して來たものであり、この精神は他から教へられたるものでも強ひられたるものでもなく、只民族生活の自然の中に産み出されたるものである。彼等はその生活々動の中に何等の不平不安もなく、仕事そのものが經濟生活であり、感謝の生活であり、敬虔の生活であり、幸福そのものであつた。然るに時代の推移と共にいつしか階級思想は指導階級にその重點を置き、勤勞的勞作を顧みず、却つてこれを卑賤なる業と思惟するに至り、教育もまた知育萬能の教育となつたのである。しかしその弊風は近代に至つてその行き詰りを來し、社會に於ける勤勞的勞働の價値は認められ、教育原理としても勞作教育、作業教育が叫ばれる様になつた。しかし舊來の陋習は容易にその舊態を改めず、徒らに聲のみ大にしてその實これに

伴はず、また一般民衆は物慾にのみ懷れて勞働は單なる方法價値としての勞働となり、利己心の行くがまゝなる生活は不安焦燥の度を高め、社會的不安を醸成しつゝある。その結果は各種の疑獄・勞働爭議等の悲惨なる姿として展開されつゝあるではないか。これ三千年築き來れる民族精神の忘れられたる結果である。かゝる不安焦燥の生活には個人の發展なく國家社會の伸展は望まれない。

現代はかくも幻影の世界ではあるがそれは大人の世界であつて子供の世界は幸にも古代人の生活そのものであり、何等の不平不安もなく生活そのものが幸福の世界である。この幸福なる生活をなしつゝある彼等の生活をそのまゝに生活せしむることによつて全人教育を全うし、歪められたる現代社會の改造の出發點としなければならぬ。手工教育はこの兒童の自然なる活動性を導いて筋肉的勞働を樂しむ境地に浸らせることによつて個人の幸福なる生活と國家社會の改造の根底を培ふ重大使命を擔ふものである。前述せる通り本科に於ける製作々業は兒童の自然的慾求であり、汗なす努力的作業も彼等の喜びであり、技術の巧拙は別としても製作活動そのものに既に喜悅と満足がある。しかもその作業たるや全く無我の境地にあるものであつて、その姿こそ實に尊い聖なる姿である。この三昧境に入つての奮闘的體驗こそ神の世界に生きる門ではなからうか。かうした聖なる氣分に浸つての勞働、それは目的價値としての勞働である。而して仕事を樂しむこの境地は知情意の調和的發達と個人の經濟生活の向上が豫想され、それと同時に社會的に人と人とを結合する調帯ともなり、億兆心を一にしての協同が實現される。こゝに社會の平和と國力の進展が齎らされるのである。前節に述べたる工業發展の要件としての當業者の奮闘的努力も、かうした聖なる根底に立つて

はじめてその念願に到達し得るのであり、現代日本の要望する斷乎たる實行力に富める國民もこゝに養はれるのである。この労働を楽しむ聖なる姿、それは仕事であり行の生活である。日本人としてのこの具體的なる姿は國民道德の生きた姿であり、日本精神の顯現である。

第三章 實踐 機構

以上の考察を根底として如何に教材を味ひ、如何なる方法を講ずべきか幾多の問題があるが、本章に於いては教材内容の味ひ方を述べその着眼點を明かにしたい。

製作とは材料に機械工具を以て加工し、作品を構成することであつて、各教材の要素とも認められる普遍的なものは材料・機械工具・工作法の三つに歸することが出来る。故に指導上の着眼はこの三點を如何に見るかの考察を加ふればその目的が達せられるわけである。しかし製作内容として工作以前に如何なる材料を以て如何に構成するか計畫段階があり、また作品完成後に於ける作品の鑑賞は如何なる觀點を重視すべきかの問題もある筈である。故に以下節を追ふてその觀點を述べることとする。

(一) 材料に對する態度

製作材料を分類すれば自然的材料と人工的材料とに大別することが出来る。自然的材料の取扱に於いては科學的知識がその根底をなすものであり、その生成より製作材料として供せられるに至るまでの經路を明かにし、而してその處理法が科學的に考察されなければならぬ。例へば木材について云へばその樹種と成長の状態を研究し、然る後木材として伐出され、材料として供給されるまでの過程を明かにしなければならぬ。従つて成長の状態から木表・木裏・氣孔・木材の反張・塗装・釘の保持力等が明かとなり、伐出しに於いてその時期・虫害等が材料に關係し、製材に於いてはその乾燥法・木材の規格・價格等が明かとなるのである。人工的材料に於いてはその材料の沿革・製作方法・その品質・性状・規格・價格等に及び、その處理法が如何にあるべきかを明かにされるのである。單に材料の處理法はかくあるべしと云つた指導では處理法の眞生命に觸れることは出来ない。即ち單なる科學的研究に止まらず、自然的材料に於いてはその自然の偉大さを伺はしめ、人工的材料に於いてはその歴史的發達を知らしめ、現代人の苦心を伺はしめることによつて自然の恩恵が味はれ、先人の苦心が伺はれ、引いては材料を人格化し神化し聖なる雰圍氣に浸り得るのである。こゝに於いてはじめて材料の處理法が生ける姿に於いて受容され、創造されるのである。また材料の規格・價格等を知らしめ、且つ購入法の指導をなし自ら材料を購入せしめ實際的經濟生活を味はしめることによつて實際的な經濟的觀念も養はれるのである。彼の材料の經濟的使用にしても、單に打算的方面から材料を多く使用すれば材料費が多額を要すると云ふ考へ方でなく、自然の恩恵としての材料を無駄に使用することは、それ丈け國家の損失であり神の御心にそむく所以であると云ふ考へ方ではなければならぬ。また廢物利用の製作にしても廢物を利用すれば材料費

が要らないと云ふ考へ方でなく、捨てられる材料もこれを利用して再び新しい作品とすることは物(廢物)そのものゝ喜びであり、神への奉仕であり、また廢物より一個の作品が生れたとすればそれを大きく見れば國產の増加であると云ふ考へ方でなければならぬ。

要するに材料の指導に於いてはその生成より製作材料として吾人の手に供給せられるまでの経路を知らしめることによつて、自然の恩恵・先人の發明・同胞の努力を伺はしめ、聖なる境地に導いてこそ材料の處理方法が眞に合法的たり得るのであり、材料の節約・餘材の利用と云ふことも自ら考へられるのである。かうした味ひ方の教育に於いてこそ眞の經濟的觀念が養はれ、愛國的精神が培はれるのである。

(二) 機械工具に對する態度

機械工具は手の延長として製作に於ける重要な位置を占めるものであつて機械工具の如何は製作に至大の影響を與へるものであり、その機構と性能を知悉しこれを使用する技術の習熟によつて製作はその目的を達成し得られるのである。而して合法的なる製作はその製作に對する適良なる機械工具を使用することによつてのみ、その目的が達せられるものであり、これなくしては完全なる製作は望まれない。故に不完全なる設備によつては手工教育の目的を達成することは困難である。然るに手工なるが故に機械の使用を不必要とし、作者が子供なるが故に精良なる工具の不用を論ずるものもある。かゝる人々の論點は簡易なる物品を製作するに精良なる工具を要せず。また機械の使用は子

供の勞作的領域を少くするといふ心であらう。しかしそれは一種の錯誤であると思ふ。不良不正なる工具に憫み、且つ適當なる機械を使用せずして苦しむことが必らずしも勞作ではない。それは徒勞である。精良なる鉋の一削にも一種の心よさを感じ、精巧なる機械の一唸にも驚異の目をみはる。そこに現代文化の有難さがつく／＼と感ぜられるのであり、機械工具に對する敬虔の念も萌え出るのである。兒童に工具を大切にせよと云つても、切れもせぬ鉋や双の折れた鋸に何の愛着があらう、況して聖なる心境が生れ来る筈がない。精良なる機械工具とこれが適切なる手入とは自ら兒童の心境に永遠なるものを與へるのである。

また機械工具は科學の精髓であり、その機構を検討する時最も合理的にしてしかも少しの無駄もなく、その相互の連絡の自然なるに驚かされる。この點についても兒童の心を養ふに十分なる力が包含されて居る。かうした機械工具は我が祖先の創作又は改造になるものであり、我が同胞の努力による汗の結晶であり、社會國家に及ぼす影響の大なることを思ふ時、自然への驚異・祖先への感謝・同胞への友情及び日本人の偉大さが自ら吾人の胸にもひし／＼と迫り來るを覺えるのである。それと同時にその恩恵に答へ、先人の意志を意志として、今後これを如何に發展せしむべきかの責務が感ぜられ、躍進日本を擔ふて立つ意氣がむら／＼と湧き起るのである。かうした心境に浸る時、機械工具は單なる物として見ることは出来ない。そこに生命は與へられ七五三飾をなす心境にも到達するのである。この聖なる境地に參入してこそ機械工具の精良さは保たれ、使用法も合法的たり得るのであり、引いては作品の優秀さが豫想されるのである。而してかゝる境地への參入、それは知的注入によつてのみ得られるのではなく、作業體驗を通し

てのみ味ひ得る尊い姿である。以上の念願に立つ機械工具の指導は自ら國民的自覺の根底の上に温かき情操が養はれ
將來への發展も力強く思念されるのである。

(三) 工作法に對する態度

製作は材料と機械工具の交渉によつて作品の完成に到達するのであるが、工作方法の如何は作品の良否に至大の關係のあることは云ふまでもない。而してその方法たるや作者によつて獨自の方法があるかの様に考へられる。故に論者によつては試行錯誤によつてその方法を發見せしめることが創作であるかの様に考へて居るものもある。しかしこれをよく考察する時、そこに何等かの誤りのあることが發見されるのである。單に作ると云ふことについては種々なる方法が考へられるのであるが、最も合法的な製作方法は容易に達せられるものでもなく、また多くある筈はない。否唯一であるとも考へられる。この唯一の合法的手段によつてのみ、完全なる作品が構成されるのである。而してその唯一の工作法は既に幾百年、幾千年の歴史的發達を経たものであり、幾多の發達階梯を経て現代に至つたものである。故にその方法を他にしては良法はあり得ない。しかし試行錯誤も一方法ではあらうが、何等の基礎的因子なくしての試行錯誤は唯迷路をたどるに過ぎない。ことに教授時數の少なき現在に於いては何等の發展も望まれない。靈峰に憧れて荊路に迷ふやうなものである。古來「型を守つて型を出でよ」と云はれて居る様に、先づ先人の苦心になる洗練されたる方法を謙慮なる態度にてこれを受容れ、鍛錬の功を積んで然る後初めて憧れの彼方へ望み得るのである。

何等の根底なくして何んとか新味を出さうとしても、その苦心の結果は舊ではないが生命に觸れた新しさは望まれない。かゝる考へ方をすることは偉大なる自然を輕視し神を冒瀆するものである。しかもその方法が先人の苦心研究の結果發見されたる自法の大法則であることを思ふとき先人への感謝、尊敬が自ら感ぜられ自然に對する敬虔の念が湧出せずには居られない。かうした敬虔なる態度に立つてこそ一枚の板を切るにも一本、竹を削るにも一個の作品を構成するにも、合法的に自然に最も從順ならんことを願ひ、また一個の創作にも合自然を念願として計畫される筈であり、未知の世界への躍進が志念されるのである。即ち創作は神の御心に添ひ奉らんとする念願であると云ふ態度に立つて始めて人間教育が可能であり、この奥底に參入してこそ製作に生命が附與されるのである。

要するに工作法は科學の基礎の上に立つものであるが、單なる理法として冷やかに見ることなく、生命の世界に於いて自然に冥合する境地に導入するのである。これを無條件に信ぜしめると云ふことでなく分析的に研究せしめ、然る後聖なる姿に統一するのである。かうした製作體驗を通してのこの把握は強く固く國民的思念として躍進日本建設の根底をなすものである。

こゝに一言附加すべきことは合法的手段としての製作法は、専門的工人の眞似をせよといふことではない。専門的工人は合法的手法を習得し、多年の鍛錬を経てこれが個性化されたものであり、同じ工人にしても微細なる點は各人各様である。これを參考とすることは願ふことではあるが、そのまゝ受容れることは出来ない。しかも兒童は身體的にも精神的にも發達の過程にあるものであり、また合法的手法にも發達階段があることであるから、兒童心身の發達

に應じ次第に高次の方法へ發展せしめることが自然である。こゝに工作法の兒童化といふことが考へられるのである。しかしどこまでも合自然でなければならぬことは論ずるまでもないことである。

(四) 製作意圖に對する態度

作品構成の最初の出發段階は製作の意圖である。この意圖を實現する爲めには先づ目的が樹立されなければならぬ。而してその目的は兒童の生活に出發することあり、家庭或は社會生活に出發することがある。それは總べて自己又は家庭或は社會の生活擴充を企圖することである。即ちその製作は自己の生活に利便を得やうとか、家庭の爲めに社會の爲めにと云ふ意志が根底となつて着想されるのである。そこには自己の生活擴充への喜び、家庭の爲めに社會の爲めにする善への喜びが流れて居るのである。

次に來る問題はその目的を實現する爲めに如何に作品を構成すればよいかと云ふことである。この段階に於いてはその作品の用途即ち機能の上からと今一つはその環境の即ちその作品を置く場所との關係が考慮の中心となるのである。用途の上からは使用上の利便とその堅牢さを考へなければならぬし、環境の上からはその場所との調和と云ふことが問題となるわけである。一例を本箱になつて説述すれば書籍の大小、引出の大小によつてその位置が定まり本箱の大きさによつてその材料の厚さと奥行が考へられなければならぬ。そこに使用上の利便とその堅牢さが實現されるのである。この實用的な考察によつてそこに安定・平均・調和等の美の要素が當然生れて來るのである。また環境との關

係からはその本箱を洋間に置くか和室に置くか隅に置くか中央に置くかと云ふことによつて形の上にも相異があり、壁の色、附近に置かれたるものとの調和を考へる時、その材質・着色・艶出等が問題となるわけである。これ美を求めての創造である。而して以上の考察の爲めには資料の蒐集研究・構想等の段階を経て着想に至るものであるがこの段階に於いても合自然を念願としての考察が根底とならなければならぬ。

次にその着想は正しく製圖に表現されてはじめて製作の意圖が圖上に實在の姿として現れて來るのである。この製圖の段階に於いては正確に綿密に美的にといふことがその重點となる。一線を引くにも時には呼吸を止めての眞剣さが必要となり、各圖面の配置・線及び文字の調和等美的考察が要求されるのである。こゝにも兒童の心境を養ふに足る大なる力が包藏されて居る。

次にその製作に要する材料の見積をなし、材料の質と量とを決定し、その製作に要する金額の概算を要することゝなる。こゝに於いて材料の規格及び價格が切實なる問題となり當然經濟的考察が加へられ、實際的な經濟生活が味はれるのである。要するに以上の設計の過程に於いても創造・實踐・道德・經濟等の中心生命が聖なる境地に於いて味はれるのである。

(五) 作品に對する態度

本科に於ける作品は作品そのものゝ用途への機能を生命とするものである。故に作品構成の計畫段階に於ても作品

の機能をよりよく完全に達成せしむる爲めには如何に構成すべきかに全知能を傾注すべきである。而して作品の機能をよりよく完全に云ふことは使用上最も便利に最堅牢にと云ふことである。これは即ち最も自然にと云ふことである。一步進めて云へば大自然の法則に合致しようとする念願であり、神の御心に添ひ奉らんとする願望である。この望が最も完全に達せられたる時、作品そのものゝ形態もまた自ら美の要素を完全に具備したもとなるのである。

然るにこの計畫段階に於いて一般に考へられることは作品の使命そのものよりも如何に美的に作らうかと云ふことが第一要件として考へられることが多い。しかしこゝに考察を要することは美の依つて来る所以を明確ならしめることが中心問題となつて来るのである。この根底なくして徒らに裝飾的加工を施したとしても作品としての眞の美は表れない。況んや裝飾的加工を施すことによつて作品の用途への使命が多少でも減ぜられる様では美として認めることは更に不可能である。若しこれを美として認め得るならば、それは本科に於ける作品そのものとして見る態度ではなく作品を離れての美的鑑賞であり、表現から見ればその作品を借りての表現である。即ち美的表現の爲めに壺を借り本立を借りて物されたる美の表現である。従つてその作品は壺でもなく本立でもない(形は壺であり本立であるが)、それは別な世界に住む作品であり、生命を持った作品と云ふことは出来ない。これを人體について云へば如何に扮飾を施したとしても健康の美を他にしては眞の美は認められない。若しこれに美を認めるものがありとすれば、それは人としての美ではなく衣服としての美であり、扮飾としての美である。何等の扮飾はなくとも健康體は健康體そのまゝ十分に美は認め得られるのである。作品に於ける美も作品そのものゝ健康に眞の美が味はれるのである。しかし裝

飾的加工を全然排撃するものではない。作品の機能を中心生命とし裝飾的加工を第二義的に見るのである。即ち作品の機能を損することなく、その用途に即してその形態に即して裝飾的加工を施すことでなければならぬ。尙ほ進んでは作品の機能を何等かの意味に於いて一層價值づけることがその重點である。もし粗雑なる作品を裝飾的加工によつてこれを糊塗しようとする様な考へ方は擧げすべきことであり、我民族精神を傷けるものである。

要するに作者が作品構成に當り、美的作品たらしめんとする意圖には贅意を表すものではあるが、人爲的に扮飾によつて作品を美化しようとする、即ち自然を無視するやうな態度は最初の出發點に於いて既に誤りである。美的作品への念願は自然に一步たりとも近づかんことを念とし、謙虛なる態度を以て作者自ら自然の懷に抱かれてはじめてその作品は無理なく、合自然たり得るのである、そこに作品の機能は最も完全に、また美の要素をも多分に具備し得るのである。かうした態度に立つてはじめて自然に對する敬虔の念は培はれるのである、また一面作品の機能の増進即ち機能の創造は國民生活の擴充であり發展である。この擴充發展によつて躍進日本の發展への礎石が築かれるのである。

以上の論述を通して作品鑑賞の方面より見ればその要點は次の三點に歸着すると思ふ。

- 一、作品の構成に於いて科學的方法が如何に完全に用ひられて居るか。
- 二、作品の機能が如何に完全に達成せられて居るか。
- 三、裝飾的加工が作品そのものゝ生命を如何に助成して居るか。

尙ほ残されたる鑑賞の領域はその作品を通して作者の熱と力に感じその人格に接することである。作品は作者が全霊を傾注して作り上げたものであるから、そこに自らその人格が冥々の中に表現され、何人にもよく観取されるものである。故にその作品を鑑賞することによつて作者への同情・尊敬の念が自ら湧き出づる筈である。鑑賞もこの領域に達してはじめて發展性に富める或る力として自己のものたり得るのである。ことに優秀作品に接しては作品の自然そのまゝの姿に自ら聖なる境地に浸ると共に作者に對する敬虔の念が自ら感受されるのである、この境地は鑑賞の到達點であり、國民的情操を陶冶する契機である。

第四章 教育者のあるべき姿

以上述べたる如く手工教育は空虚なる概念としての受容ではなく、主として筋肉的體驗を通しての内より生み出す教育であり、小さき計らひを捨て、自然に湧き出づる泉に人格の根本を培ふ教育である。故に本科は單なる技能科としての範圍に踰越すべきものでなく廣く人間を作ることの全局面に着眼すべきである。即ち技能の巧拙にかゝらず普遍的に到達し得る所の人間教育の根本に突入しなければならぬ。換言すれば製作體驗を通して認識や道徳や藝術の世界に導き、やがて聖なる無限の世界に導入せんとするものである。この神の世界に根底を置いてこそ當然の歸結として製作能力は養はれ、作業の趣味は培はれ、勤勞習慣は確立され、國民的自覺は養はれ得るのである。しかし言ふ

は易くして行ふは難し、聖賢なほ且つこれを仰つ、況んや凡夫に於いてをやである。こゝに於いて最後に求むるものは教師の人格であり修養である。前述せる通り兒童をこの聖なる境地に参入せしめることは教師の力によることであるから、教師先づ聖なる殿堂に参禪し信念として信仰としての把握がなければならぬ。このことなくして單なる方法に終始する時決して眞の生命に到達することは出来ない。而して聖なる殿堂への参禪、それは唯製作體驗を通しての把握の一途あるのみである。こゝに鍛鍊に鍛鍊を重ねてこそ自ら聖なる殿堂に到達し得るものであつて、求めて得られざるものであり、到らざらんとしても到るものである。この聖なる境地に浸つてこそ内なるもの、閃めきは、言葉の上にも行ひの上にも技術の上にも自ら現れ來るものであり、一個の示範もこれによつて兒童の内に自ら高きものを把握せしめ得るのである。しかしてこの把握は概念の彼方にある眞理への把握である。尙ほ製作そのことは既に他なく我なく物なく總べての對立が統一されたる尊い姿であり、只あるものは純一なる生命の自らなる騫動あるのみである。即ち教へられるものも教ふるものも同行の行者であり、三昧境に浸る尊い姿である。共に喜び共に悲しみ共に苦しみ到らざる子供にさへ教へられ、互に援け勵ましつゝ働くこの姿こそ教權・教育愛・指導・學習等々の言葉の彼岸に輝く寂光である。これ指導の精髓であり、教師の人格の顯現である。國民的自覺に立つ手工教育もこゝに達成し得るのである。

國民的自覺に立つ音楽教育

第一章 音樂の純粹姿態

音樂教育に關する各種の研究は如何なる立場に於て論ぜられるも、其根底に於て研究の基礎として考へられねばならないことは、如何なる論説も、音樂の本質的立場より説明されると共に、教育の本質に基いて考察されねばならぬことである。然もこの兩者の關聯構造については特に慎重に考究されねばならないのである。

現下我が國教育の主潮として「日本的自覺」を國民教育の根底に一層深く意識させることに教育各般の作業が進みつゝある。日本的自覺の基底をなす「日本精神」の研究は、哲學者、教育學者等あらゆる思想家によつて闡明され、又それが實際教育との結びつきを教育實踐家によつて考究されつゝある。これ等の結果日本に於ける國民教育に於ては從來の外國輸入思想を基とする教育思潮から漸く自覺め、日本独自の立場に立ち、日本人としてあるべき國民の養成を目的とした日本教育であらねばならず、其具體的姿態としては日本の特殊な位置と日本人独自の民族的個性を明らかに自覺して、日本独自の國民教育の指導原理を確把し、これが具體的實踐にまで及ばさねばならないのである。

こゝに音樂教育を民族的立場から眺め、日本教育としての音樂教育は如何なる様相にあるべきかを究明するに當り、先づ日本精神と音樂教育の關係を考察しなければならぬ。日本精神を音樂教育の上に具現することに二つの考へ方がある。一は日本精神は現在の音樂よりもむしろ日本歴史が幾千年來作りあげた所謂日本音樂の中に求むべく、

従つて所謂西洋音楽を捨て、純粹の日本音楽に戻さねばならぬといふ考へと、他は音楽は國境を越へた人間性一般の上に立脚するものであるから、偏狭な考へにまどはされずに大いに理論的にも技術的にも優秀な西洋音楽に學ぶべきであると主張するものがある。前者は即ち保守的な考へ方であり、後者は進取的な考へ方である。従来の日本音楽の中に純粹の日本人の個性的な感情が包蔵されてゐることは事實である。従つて過去の日本音楽を反省し、そこに日本人の感情的個性を發見し將來の音楽教育の上に役立てる事は極めて大切な事であるが、全く他を排斥して只昔に返るといふ考へは妥當ではない。又音楽を國際的に考へて如何なる民族の音楽も全く同一に取扱ひ、又學理的根據の確實な規模の雄大な西洋音楽に心酔して日本人としての民族的個性を省みない事も誤りであるのは言ふまでもない。こゝにこの關係を一層精密に考察し、日本教育としてのあるべき音楽教育の姿態を明かにせんとするものである。

(一) 音樂の民族性

世界人類如何なる民族に於ても音楽生活がある。其音楽の様式や形態は、野蠻な未開民族より發達した文化民族に至るまで多種多様である。かく世界數多の民族が各々民族独自の音楽を持ち、其色彩を異にしてゐることは何に原因するのであらうか。先づ文化の程度の相違により音楽生活の様相を異にする。本來音楽は音感覺を通しての美的享受である。人間の本能に基礎を持つ美的享受は、未開の蕃人の間にも原始的素朴な形態に於て極めて盛んに行はれてゐるのである。然るに文化の上は原始的な素朴な音楽には満足し得ず、其文化の發展に従つて音楽の様相も變化し進

展して行くものと見ることが出来る。故に現在文化發展の各段階にある各種民族が其民族文化にふさはしい音楽形態を持つてゐることは當然である。又音楽は民族文化の程度の上のみならず其性質によりて規定されるものである。民族文化の性質は又其民族の持つ歴史・言語・風俗・習慣・生活環境等より規定されると共に、民族の持つ民族精神の一の現はれたる民族的感情民族的趣好等によりて規定されるものである。

由來音楽は文化の中の一要素であるのであるが、常に他の諸文化と緊密な關係を保持しつゝ進展するもので、他の諸文化から切り離された音楽は概念的には考へられるも、現實存在としてはない譯である。數多文化の關係的姿態たる社會文化の具體相に於て考察することに於てこそ眞の音楽姿態の確實な把握がなされねばならない。故に音楽の民族性を考へるに於ても常に他の文化的背景を考へつゝ其實相に於て眞の姿を見出さなければならぬ。又民族精神の生み出す民族的感情は音楽の形式を規定すると共に更に進んで音楽の旋法をも規定せんとする傾向を有する。何れの民族に於ても、其未開文化時代に於ては未だ定まれる旋法を有しない様であり、又各種の旋法が行はれる様であるがこれが漸く進むに従つて、其民族の感情生活を最も適切に表現し得る旋法を選び、これに従つて其民族独自の音楽が發達する様である。ギリシヤ時代に於けるイオニヤ、ドリヤ等數種の旋法が中世教會旋法に統合せられ、更に民謡に基礎を持つ長短兩旋法が之にかはりたるが如きは其一例であらう。尙又旋法よりも一層根底的な音律の構成に於ても民族的獨自性を持つ様である。従つて其音律に適合せんが爲に樂器の作成或は選擇が異なる。故にこの樂器の構造上の相違も亦日本音楽の個性を規定する重要な一要素となるのである。従つて新しい樂器の發現により又輸入によりて新

しい音楽形式が生れ出ることも事實である。

又民族間に於ける言語の相違は音楽の様式に相違をきたすものである。純粹音楽に於ては言葉は全く不必要なるものではあるが、民族的感情の最も顯著に現はれたる民謡歌謡等に於ては、民族語としての言葉が極めて大切な位置にあることは、その言葉と音楽との關係を考察するものゝ等しく認める處である。尙小學校に於ける音楽教育の材料となるものは主として歌謡であるが故に、歌謡については後節に一層詳論したいと思ふ。

次に音楽と民族意識との關係を考へてみる。ロシユの有名な序曲、ウキリアム・テルの最初のパート「黎明」は先づフルートの甘い響きが訴へる様に主題を奏し出すと、イングリッシュホーンの懐かしい牧歌の節が聞え、標題の示す静寂そのものが表出される。スイスの人々はこのホーンの音に言ひ知れぬ懐かしさを持ち、何處に居つてもこの旋律をきくと懐かしい故郷を思ふ情が勃々と起つて來るといふことである。如何にも民族性を全く異にする我々が之を聞く時に於ても、スイスの廣大なアルプス山麓の放牧の豊かな情景を思ひ、其黎明の静けさをしのぶに十分である。まして幼少からこの中に育ちこの情趣の中に培はれた人々に取つては、このホーンの牧歌は如何に深刻に響くかは想像するに難くない。これは單にスイス國民に於てのみ考へられることではなく恐らく何れの民族に於ても同様であらう。同族の間に生活する間はさほど民族意識が現はれなくとも、一度他の中に入り異なる社會に生活する時始めて民族的感情に自覺を持つ様になるのである。常に自己の音楽の中に生活する時、自己の音楽が如何なる形態を有し如何なる感情的内容を持ち、如何なる性格を表出するかは未だ意識上の問題とはならないのである。他を知り他と比較

し再び自己に戻つて自己の眞の姿が自覺されるのである。この意味に於て日本音楽の全盛をなした徳川後期よりも西洋音楽の輸入によりて彼を知りて後の現在により深き日本の自覺が生れるのは當然のことである。

(一) 音楽の社會性

音楽の形態並びに感情的内容及び其の性格が民族精神及び民族文化に規定されることは前述の通りであるが、更に音楽は社會的規定をも受けてゐるものである。音楽は常に歴史的社會的情勢と關係しつゝ推移するものである。最も原始的な社會に於ては、戀愛と狩獵と神の讚美に對して音楽が關係し、原始的な戀歌・狩獵歌・牧歌・軍歌・宗教歌として現出されるのが普通である。然るにこの原始的社會が進展するに従ひ、これ等の音楽が發展しその社會情勢の變移に従つて音楽も消長する。中世ローマ教會の全盛時代に於ては音楽は全く宗教の配下にあり、従つて宗教音楽は發達の頂點に達したる如く、又貴族中心の文化時代に於ては音楽の様式も貴族的な發展をなした如く、文藝復興期以後の音楽は今までの形式的な音楽に更つてロマンチックな音楽が勃興したる如くである。又我が國に於ても上古は全く戀歌・軍歌・宗教歌即ち神樂歌によつて極めて原始的な音楽生活が營まれてゐたのであるが、佛教の傳來以後、佛教音楽の影響を受け、奈良以後の日本音楽は殆どこれと關係なきものはなきまでの大勢力となつてゐる。藤原の貴族文化は貴族的な管絃舞樂を現出し、鎌倉以後の武家精神と、日本佛教の興隆により平曲・謡曲が現はれ、特に能樂は武家の式樂として今日に至るまで傳承されてゐる。江戸時代に入りては漸く民衆の文化向上し、江戸大阪の町人文化

の目覚ましき發達は三味線の出現と相俟つて淨瑠璃系の義太夫節、富本節、新内節、常盤津節、清元節を始め江戸長唄、地唄、小唄、端唄等の民衆を對象とする音楽が目覚ましき發達を見せてゐる。藤原文化の生んだ管絃、舞樂は支那音楽傳承後未だ間もなき事とて眞に日本的な味を出しては居ない様であるが、貴族中心のこの時代に最もふさはしきものとみられる。然るに平安末期に於ては漸くこれ等の貴族音楽の中にも日本的な表現を見せてゐる。武家時代の音楽は琵琶にしても能樂にしても所謂武士道精神を感情内容としてゐることは、今に残るものを見ても解る。江戸音楽に於ては對象が民衆である點に於て武士道精神も民衆化された武士道精神即ち義理人情を感情的内容としてゐるとは我が民族精神の止むに止まれぬ發露と見ることが出来る。

以上の如く音楽の發達は社會情勢に依存するもので、貴族社會の全盛時代に於ては貴族的な音楽が發達し、民衆文化の黄金時代には民衆的な音楽が行はれるものである。現在及び將來の我が國の文化は一部貴族の間に止まるものでもなく又低俗な民衆に迎合するものでもない。民族全體が確固たる國民的信念のもとに自覺的に創造する日本文化でなければならぬ。故に音楽に於ても或一部分の人士によつてのみ理會し得る、徒らに高踏的なものを望むのでもなく又如何なる人にも歓迎されることを以て一般民衆に迎合せんとする傾向も決して望ましくない。國民の感情的個性の上に立つて國民的情操を健實に進展せしむるに足る音楽でなければならぬ。國民の中にこの健實な音楽に理解を持たぬ者があるとするならば、どこまでもこれ等の人々をして理解の出来るまでに導くことが必要である。音楽を民衆化せんとすることは決して音楽を低俗にすることではない。健全なる音楽によつて民衆を音楽化することだけ

ばならない。

(三) 日本民族の情操的個性

音楽が民族によつて其々独自の性格を持つてゐること、この性格は、民族精神、民族歴史、民族文化等によつて規定される事を述べたが、我が國の音楽が如何なる性格を持ち、如何なる感情的個性を有するかを振りかへつてみる必要がある。我が國民の感情的個性を知る爲に過去に於て我が民族が作り上げた種々の音楽を吟味し、そこに表現されてゐる民族的感情を考察することが先づなされなければならない問題である。我が國上古の音楽は前述の如く戀歌、軍歌、神樂歌として現はれてゐる。其當時の如何なる旋律によつてこれ等の歌が唄はれてゐたかは解らないが、今に残るこれ等の歌詞と當時用ひられた樂器等から推察して極めて素朴なものに相違ない様である。戀歌は歌垣として男女の情を極めて素朴に在りのまゝに表はされてゐるのである。記紀萬葉に残るこれ等の歌詩を現在の我々が見る時、我等の祖先が如何なる感情生活をしてゐたか、又如何に純朴なすなほな心持を表現してゐるかを伺ふことが出来る。神樂歌は又原始時代に於ては何れの民族に於ても存するものではあるが、特に我が國に於ては神への生活は極めて純粹なものであり、他の民族に於けるが如き現實生活の否定や、未來への渴仰と言ふごとき所謂宗教的な臭味はなく、只我等の祖先を祭り現在の生活を祝福するところの現實肯定の明るい態度であることが察せられる。大陸文化の渡來後一時全く外來文化に壓倒され何等日本の個性を持たざるかの如き觀を呈したのであるが、之もやがて日本化され個有の

日本精神により平安後期に於ては大和音楽を全く自己籠中のものとしたのである。即ち今までの朴訥な音楽の中に急に大規模な楽曲形式を持ち、進歩した各種の楽器を用ひ、巧妙な演出をなし得る外來音楽の突入は確かに當時の日本人を驚かした事であらう。従つて先づ楽器の使用法、楽曲形式の理解、演出技法の習得に没入したのは當然のこと、考へられる。然るに漸く其技法を習得し楽曲を理解し得た頃には早くも日本的な新しい形式を生み出してゐるのである。それも最初は唐樂、高麗樂に模した形式に於て作られてゐたが漸時、催馬樂、朗詠、今様と日本の色彩を濃厚に表出するに至つたのである。

以上の様な外來音楽の輸入と其後の情勢とは維新後の西洋音楽の輸入と其後の情態並びに現在叫びつゝある國民音楽の建設とは時代こそ異なれど殆ど同様の経路をたどるものではないかと思はれる。

鎌倉以後の琵琶及び能樂には多分に武士道精神が含まれてゐることは前述の通りであるが、これは武士の生活が藤原貴族の生活と全く内容を異にし極めて緊張したものである事と當時新らしく勃興した日本佛教の影響によりて純然たる日本音楽が構成された譯である。即ち自己を内面的に深く見つめることにより、一切の現實生活の奥に又は其中に佛の大精神を見出し、この佛の精神に生きることによつて現實生活を意義あらしめ、小さき自己の生活を捨て、佛の精神に生きんとする考へが、社會全般に擴まつて來た。もつとも自己自身の中に佛性を認め、その伸展に精進して自ら佛の域にまで高めんとする考へる聖道門も現世の彼岸に絶對なる佛を仰ぎ、佛の廻向によりて成佛せんと願ふ淨土門も方法論上の相違はあるにしても、共に現實生活を深く内省することにより、狭き自我を捨て、絶對我に生きん

とする精神が其根底をなしてゐることは疑ふべくもない。この考へ方と、古來から傳承してゐる明るき、朗らかな、おほらかな、民族性とが音楽藝術の上に形式及び内容としてにじみ出で、こゝに所謂「さび」「靜寂」等の象徴性、深刻性等が日本的個性として現はれたと考へることが出来る。

徳川期に於ては三味線を基底とする長唄淨瑠璃の各派が擡頭して一般民衆を對象とした絢爛たる日本音楽時代を建設した。一般民衆を對象となしたるが爲に大衆社會の生活俗事を素材としたるもの多く、爲に當時の殆ど總ての儒者爲政者の排撃するところとなつたが、それにもかゝらず益發展をなしたことは一般民衆の持つ感情と合致し大衆の魂を感動せしめるに足る魅力を持つてゐた爲であらう。この期の藝術的精神としては義理人情と言ふ形に於て人間性の本質に觸れることであつた。これは前期の佛教思想と武士道精神が漸く民衆化して國民全般に擴充して來た爲であらう。爲に音楽も常に言葉や思想と提携して、歌謡となり劇音楽として發展したのは當然のこと、思はれる。然も對象が一般民衆であるが爲に音楽的教養を必要とする純粹音楽の發展は未だ見るに至らない。

更にこれまで發達し來つた音楽歴史の上から我が國民の音楽的特性を見るならば、リズムの觀念の非常に發達せること、和聲的關心の其割合に少なきことである。リズムの發達は普通我が國民性が感情的であることからして、感情的要素を多分に含むリズムが發達した様に考へられてゐるが、勿論かゝる民族的個性が其基底をなしてゐるのは疑を容れないが、尙其上に樂器の特異性も亦これの發達を促進したものと考へることが出来る。和聲的發展に乏しいことはこれもやはり根底には民族性が働いてゐる理性的な和聲を欲しない爲と考へられるも、日本音楽が常に言葉との關

係に於て發展したが爲に、純粹音楽に於けるが如き和聲の發展は不可能であることも考へられる。

最近の新らしい作品を見ると今までの西洋音楽の模倣から脱して、日本的個性を強く表現せんとしてゐる意圖が十分に覗かれる。これ等の現象は單に時代思潮としての日本精神から來るものと見ることは出來ない。維新以來取り扱つて來た西洋音楽にどこが日本人として不満足のところか感ぜられ、こゝに我等のものとして改造或は新設せんとする止むに止まれぬ心から出たものと思はれる。勿論現今まで西洋音楽に於ても名は西洋音楽と言ふも、實は日本人の取扱つた西洋音楽であり日本的感情によつて表現された西洋音楽である。作曲に於ても西洋の樂器を用ひ、西洋の旋法を使用してはゐるが、實は日本人の作品であり日本的感情の個性的表現である事は勿論である。従つて日本人の作品に對して西洋音楽と名づけるのは不可であるとさへ論ずる人もある譯である。又西洋人の作つた純粹の西洋音楽に對してさへ、解釋し演出するものが日本人である以上日本的解釋をなし日本的演出をなすより仕方がないのである。

又最近に於ては所謂日本音楽と西洋音楽との各の長をとりて新しい日本音楽即ち新日本音楽の現出するところとなつた。然しこれもまだ漸くその緒についたばかりで種々の點に於て改善を加へらるべき餘地が多分に存することは言ふまでもない。國樂の建設とか國民音楽の樹立とか言葉は變れども、日本民族の感情的個性を基底とする新音楽の開發を目標とする從來の種々の運動は、今國民全般の民族意識の自覺により益強調される様になり、音楽界一般の關心がこゝに向けられてゐることは喜ばしい次第である。

(四) 再現藝術としての音楽

音楽には純粹の創作たる作曲と、作成された作品を再現する演奏とがある。従つて繪畫や文學の如く作者と鑑賞者との關係ではなく、作者と鑑賞者との間に演出者が介在するのである。この演出者と原作者との關係及び鑑賞者との關係を明確にして置くことが音楽理會の上に又音楽學習の上に大切な問題である。原作者は自己の感情意志のままに作品を構成することが出来るので、自己の個性を十分に現はすことが出来るが、この作品を演出する演奏者の感情的個性は如何に考ふべきであらうか。勿論原作者自身が演出する場合にはこの両者が全く同一であるが爲に問題はなかにしても、多くの場合、コンポーザーとプレーヤーとは別である事が多い。かゝる場合のプレーヤーは、自己の心意を通して作品を理解し、作品の持つ感情内容即ちコンポーザーの感情内容に共鳴して、こゝに自己の感情と作者の感情とは融合して始めて立派な演出がなされる譯である。然しこの二人格の感情的個性が全く同一である事は嚴密に考へればあり得ない事であり、従つて全く一になることはあり得ないのである。こゝに於て再現者としての態度はどこまでも原作者の意圖を重んじて、作品の感情的個性を十分に生かす様に心懸けねばならぬのである。自己の感情的個性を殺して作者の感情内容に生きる態度が必要である。かく考へれば一見演出者は原作者の模倣であり、藝術に於て最も大切な創造的要素を全く持たぬかの如く考へられるが決してさうではない。演出者といへども決して單なる機械的存在ではない。自己の感情を殺して他の感情に生きるのであるが、小さな自己の主觀にとらはれず、普遍的な大

精神に生きること、に自他の境を超越した全一の藝術境がある譯である。演出者が作品を見、表現する態度も、鑑賞者が聴演出をく態度も同じく自己を捨て、作品に生きるのであつて、これは單なる模倣ではなく構成である。アーティストレスが「藝術は模倣である」と言つたのも決して機械的模倣と考へることは出来ない。

かくの如く自己を殺して他に生きると考へるならば演出者の感情的個性は何處にあるべきか。感情的個性とは心意の最も根底に存するもので、如何に作者の心を尊重して表現しても尙自己的なものが残るので即ち個性が残るのである。表はさんとして現はれる個性ではなく、隠さんとして尙表はれるところのものが眞の個性である。一の楽曲を幾多の人々によつて表現されるも、楽曲の持つ感情内容は一作者の個性的表現であるにかゝらず、演出者によりて趣を異にするは蔽ふに蔽はれぬ個性の發露である。

又日本音楽は古來傳統を重んじて來た。この昔からの型を破ることが大切であるとはよく言はれる事であるが、型を破るとは如何なる意味であるかを明瞭に知らねばならない。昔のものは古いから斬新なものを望むのは一般の常であるが、新奇を好み斬新を追ふ一般に迎合せんとする心から出たものならば問題でない。古きを捨てるとは古來の傳統を捨てることではない。古きものゝ中の改めねばならぬ部分を改めることでなければならぬ。この改めるに當つては慎重な考慮により良きに改める事が大切である。改めたが爲に却つて悪くなる様な革新は藝術を破壊するものである。傳統とは一の規範である。規範に入りて規範を脱することが藝術の本道であるとするならば、先づ傳統に入る必要がある。小さき自己の作意を捨て、敬虔な態度に於て先づ傳統に入り傳統精神を體得しなければならぬ。こゝに

も自己を殺して他に生きる態度が必要である。寶生九郎氏の「謡曲口傳」に能は完成した藝術であるから幼少の時から身を入れて全く自己を現はさず、傳統のまゝに、一分一厘も違ふところなく、何處如何なる時に於ても全然同一に出來得るまで修練をつまなくてはならぬ。自分の特色を出さうなど、毛頭考へてはならぬと言ふことを述べてゐる。これは能樂謡曲についての態度であるが、恐らく再現藝術たるすべての音楽の學習に於ても言ひ得る態度であらうと思ふ。特に個人主義的な考へを持たぬ日本民族にとつて古來かゝる態度により音楽が發展し來つた事は當然の事であらう。

(五) 歌 謠

歌謡は音楽的要素と文學的要素とが一體となり一の歌謡形態をなしたものである。故に純粹に音のみによる純正音楽と同じく論ずる事は出来ない。我が國に於ける古來の音楽は殆ど總てが音楽との關係を持つてゐることは前述の通りであるが、言葉と關係してゐることは一層民族的色彩を濃厚にするものである。何となれば言葉による感情は音の如く直接我々の心に響くものではなく概念を通して心に通ふのが主態である故に、概念の構成はその言葉を生み出した民族間にあつては容易であるものも全く異なる言葉を持つ異民族にはなか／＼容易なことではない。従つて楽曲と歌詞との感情のデリケートな結びつきは、民族を越へて理解することは困難である。音楽に國境なしと言ふも純粹に音のみから來る音楽美に於ては或程度まで可能であるも、言葉を伴ふものに於てはよほど理解の仕方が違ふと見なければ

ばならぬ。我が國の音楽を批評する西洋人が、この點を考へずして日本音楽幼稚なりとするも一向問題にはならぬ譯である。特に我が國の音楽に於ける言葉と音との關係は西洋音楽に於けるよりも一層緊密であるかの如く思はれる。音と言葉を要素的に考へる西洋人の音楽構成と音と言葉を一體的に觀る日本人の作品とはよほど異つた形式上の相違を持つことは當然である。

我々が西洋の樂器を用ひ西洋の旋法を使ふにしても、日本語の詩と結ぶ歌曲の構成は日本獨自のものであり、作品の眞の價値は我々にのみ解るものであらう。従つて歌謡の表現形式も西洋のそれとはちがひ、日本語の發音發聲を基底として日本語の持つ感情を十分に表現し得る様な歌曲が望まれ、歌ひ手自身もこゝに心を致して精進してゐることは喜ばしい次第である。

第二章 音楽の教育姿態

(一) 音楽と教育の關係

音楽の純粹姿態に於てはさほど教育的意味を持たない。古來音楽によりて社會を教化し淨化し進展せしめんとするこゝろみは屢々見受けられるが、之は純藝術の立場に立つて考へられたものではなく、教化の方便として音楽が使用

されたのである。特に音楽は宗教と關係することは最も古くから行はれたもので今尙離れるべからざる關係を有してゐる。これは音楽自身は教育的意味を持たぬにしても、音楽が人間の魂に直接響いて強い感動を與へるものであり、冷かな論理や學問とは違つてあつき熱情を以て情感に迫るが故に、學問や論理を超越した宗教或は教育に關係を有する譯である。かくの如く音楽は人間の魂に熱情を以て迫り來る力を多分に持つものであるが故に、健全な音楽は教化に役立つと共に、邪惡な音楽は墮落衰頹に導くものである故に教育としての音楽はどこまでも健全なものでなければならぬ。太宰春臺は「今の世の淫樂多き中に糸竹のたぐひには三味線、うたひ物類には淨瑠璃に勝る淫聲なし。士君子のかりにも聞くべきものにあらず」といひ、貝原益軒も「小唄、淨瑠璃、三味の類淫聲を好めば心を損ふ」と説いてゐるのは其音楽の感化力の偉大なるを物語り邪惡な音楽を戒めたものである。かくの如く音楽は極めてよくきく薬でもあり又毒でもある。この毒と薬を使ひ分けて人格陶冶に役立たしめ、藝術的品性の向上と高潔なる國民的情操を培養することが音楽教育の大切な使命である。

従來音楽教育を以て單に音楽を教へることゝ考へられてゐて、情操の陶冶を第二義的に見てゐる傾きがあつたのであるが、國民教育に於ける音楽教育は言ふまでもなく職業教育でもなく又單なる娛樂でもないのである。そこに大きな教育的意義を持つてゐることを忘れてはならない。

(二) 國民的情操

音楽教育の目的が單に歌ふことの能力を養ふことでないことは前に述べたが、之は歌ふことを輕視するのではなくて歌ふことが最後の目的でないことを意味するのである。歌ふこと聴くことによつて陶冶されるものは情操である。ダムロツシユは内體的な耳の訓練と共に心の耳を訓練せねばならぬと述べてゐるが、心の耳とは情操を意味するものであらう。

國民的情操の向上は國民全般の藝術的品性の陶冶にまたねばならぬ。道德上に於ける品性と同じく藝術に於ても藝術的品性が考へられる。然も世の多くは道德的品性を以て人格を決定せんとしてゐるが、道德的品性の可成高い人々の中にも尙藝術的品性の極めて低い人々の可成多くあるのを見る時、藝術的陶冶の必要を益々深く感ずる譯である。音楽的品性は多く音楽的趣味として現はれる。即ち高き品性を持つ人は藝術的價値の高き高尚な音楽を好むと共に、その低き人は低俗な音楽に喜々としてゐるのである。個人々々の樂音的品性の向上はやがて國民全般の情操の向上となるものであり、個人の音楽的品性の向上は、常に正しきよき音楽に接することによつて培はれるのである。こゝに教育音楽に於ける教材が如何に重要性を持つものであるかが解る。

かくの如く教育に於ける音楽は人格の向上、情操の陶冶を指すものであるが、これは音楽を通してなされるものでなければならぬ。音楽以外のものによつてなされるのは音楽教育には入らない。所が日本人の情操陶冶に役立つ音楽と言へば、非常時日本の歌であるとか、國民精神作興の歌であるとかであるかの如く考へられるが、さうではないのである。如何にもこれ等の歌は國民的情操の陶冶に役立つものではない。然しこれ等の役立ち方は音楽を通して

よりも音楽以外の要素から來るものが多い。即ち之は非常時の具體的觀念から或は歌詞の意味から來るものである。かくの如く音楽以外のものによつて陶冶される國民的情操は教育的であるにしても音楽教育的ではない。従つて之等を以て國民的自覺を促すことが音楽教育の總てではない。國民的自覺に立つ音楽教育とは、如何なる教材にしても、音楽教育の目的に向つて邁進し岐路にそれることなく其使命を全うすることにあるのである。故に徒らに外國音楽を排斥したり、日本古來の音楽に引き戻したりすることではなく、彼を研究して我が短を補ひ、昔を振り返つて前途を誤らず、ひたすら音楽的情操の向上に精進するものでなければならぬ。

かゝる音楽的陶冶は必ず音楽表現並びに鑑賞によつてなされるものである。目標は情操陶冶であり道は音楽的訓練である。この道によるところに音楽教育の獨自の指命があるのである。音楽的訓練をなすことによつてのみ音楽的情操の向上がある譯である。故に音楽的態度、音楽的能力の養成は極めて重要な意義を持ち缺くべからざるものとなるのである。

(三) 音楽的勞作

抑々音楽は學問ではない。如何に學的に論理的に説明されても音楽の眞髓に觸れることは出來ないのである。故に音楽的訓練に於ては學的論理的な説明に止まつてはならないのは勿論である。然らば音楽の生命は何によつて把握さるべきか。知情意一體となりたる我等の心意の全體の働きによつて初めて把握さるべきものである。心意全體の働き

とは音楽を眞剣に聴くこと、又眞剣に歌ふことによつて其生命を體認し、理論を超越した音楽独自の領域に達することが出来るのである。故に音楽的訓練は音楽的勞作によつてなされなければならない。禪門に於て三慧即ち聞慧・思慧・修慧と言ひ、眞の睿智が聞即ち説明思即ち思索又は論理によりて學ぶとともに、修即ち修行によらねばならぬことを説き來つてゐるのも、ものゝ生命を把握し其眞髓に解れる爲には必ず行が必要であることを意味するものとみられる。デイルタイの生の哲學に於ても、ものゝ眞髓を明かにするに、全心意の働きを基礎とし創作力、形成力の根源を究明せんとしてゐる。教育特に情操陶冶を目指す音楽教育に於ては意志感情の強い協同による行を通して、即ち歌ふこと聴くことによつて直接音楽美の眞髓に觸れ論理を超越した世界を感得せしめねばならない。故に感操陶冶と言ふ言葉に迷はされて技術の訓練を輕視するが如きは全く誤つた考へである。この技術あることによつてのみ情操陶冶がなし得られるのである。

以上音楽的訓練は全心意の働きによる行によつてなされねばならぬことを述べたが、之は決して理論を排斥し、學問を無用視するものではない。音楽が學問や論理の領域外に其生命を持つものであること、其生命の把握には學問以外の修行が必要であることを意味するものである。故に學問も論理も其限界内に於て十分利用し、生命把束に役立つせねばならぬことは言ふまでもない。

第三章 音楽學習の態度

(一) 美的態度

音楽の生命に觸れ其本質を體得するには、論理や學問に於ては到底なし得ない事を述べたが、然らば如何にして其本質を感得し、其生命を把握することが出来るか。こゝに全心意を働かすところの精神活動が必要である。全心意を働かすところの活動は只單に音楽學習に於てのみ用ひらるゝものではなく、他の種々の了解體驗に役立つところのものである。故に音楽の學習に於てはかゝる全心意の活動が如何なる様相に於て現れるかを吟味する必要がある。心意の發動様式は態度となつて現はれる。音楽の本質把握の爲に働きかける全心意の發動様式即ち態度は如何にあるべきかを考へたい。作品を前にして我々の探り得る態度は種々ある。功利的態度、科學的論理的態度、思索的態度、批判的態度、信仰的態度、觀照的態度、これ等の諸態度の中音楽美の本質把握に最も適當なる態度は觀照的態度即ち美的態度である。

美的態度とは美の創造鑑賞以外には何等目的を持たぬものであり、只對象即ち作品をそれ自身に於てのみ見なければならぬのである。若しこゝに少しでも他の態度が混入する場合美的態度は直ちに停止し、音楽美の本質は美的對

象として現はれない。自己の作意を全く排除し一切の既有概念を一先づ取り除いて、全く自己を投げ出して純粹に對象に接するもので存在と自我の統一的综合でなければならぬ。對象の美とは其對象に投影された自己の感情そのものであるが、然もこの兩者の結合は極めて直接的で、對象の美しさは自己の感情であるとは感ぜず、對象そのもの、本質として感ずるのである。この自他一體、主客合一の境地に於て對象の生命に觸れ其精神を感得し、美的意味を獲得し得るのである。全く自己を投げ出すが故に其感情は全く對象の特性に規定され、其作品の個性的感情内容を獲得することが出来るのである。かくの如き美的態度に於て美的経験を保持する爲には、全く對象の叩くがまゝに至心意が鳴り響かねばならぬ。故にこの態度は疑問に疑問を重ね、發見に發見を重ねて行く科學的態度とは全く反對に極めて内面的なものであり、超論理的、無批判的、全體的、没我的なものでなければならぬ。

かく考へれば音樂學習に於ては全く自己活動が無いものかの如く感ぜられるが、決してそうではない。極めて謙讓な内面的なものではあるが、至心意は全く内面に沈潜して總ての自己を投げ捨てた燃ゆるが如き緊張した自己活動でなければならぬ。この積極的な自己活動があればこそ美的體驗がなし得られるので、この活動なしには直観も體認も不可能となるのである。

(二) 批判的態度

美的態度は音樂美の感得に對する只一つの極めて重要な態度であるが、この態度によつてのみ音樂的訓練がなされ

るものではない。こゝに美的態度とは全く反對の態度即ち批判的態度の養成が必要となる。批判的態度とはどこまでも自己主張的價值批判的である。従つて究理的、論理的、分別的でなければならぬ。對象そのものに没入して美的経験をなすものでないから、自己を根底とし或は規範を根據として他と比較し其價值を批判し評價する態度である。

従つてこの兩態度が同時に採り得るものではない。美的態度にある場合は批判的態度の少しでも混入するを許さないし、又批判的態度に於ては美的直観はなし得ないものである。全く立場を異にしたこの二つの態度は音樂學習の如何なる場合に於ても明瞭に區別して取扱はねばならず其仕事に相當した態度を何時でも採り得る様心掛けねばならぬ。

正しき價值批判は批判的態度の訓練に待たねばならない。作品から受ける刺戟と價值とを混同してはならない。如何に刺戟の強いもの又甘いものも、その強さ甘さによつて價值の定まるものではない。價值と刺戟は全く別個のものである。然るに音樂的訓練の少ない兒童にあつては、刺戟の強いもの感覺的要素の多いもの、又は感傷的なもの等を愛好して眞の藝術的價值の高きものを欲しない傾向を持つ。これ等兒童の音樂的訓練には、常に藝術的價值多き作品に屢々接せしめ、其發達程度に應じた教材を選択して其傾向を正しくし、美的價值判斷を誤らぬ様注意しなければならぬ。この批判的態度の養成はやがて其鑑識眼の向上となり、兒童將來の音樂生活の上に重要な役目をなすものである。

(三) 調和的態度

音楽は美であり美は調和である。調和的態度は又音楽教育上極めて大切なものである。然るに児童には競争意識が極めて強く、或は其聲の美しからんことを競ひ、或は其大きからんことを競ふ傾向を多分に持つてゐる。本来音楽は競争ではない。調和の上に立つ美である。多人数の合奏合唱に於て各メンバーが競争することなく、互に手を取り合つて一つの楽曲を構成し又それぞれのパートがよくその分をわきまへて他の諸パートとの調和を考へるところに立派な演出が行はれるので、何れか一人が功名心の爲に調和を破つたり、各パートが競争して己を主張せんとする時音楽は完全に破壊するのである。多人数の生活に於ては何れにしても調和的精神は大切であるが、音楽の構成表現は多人数の共同労作であるが爲に、自分勝手な解釋や、勝手な演出は許されないのである。この協同的、調和的精神は唯單に音楽の學習に止まらず、生活全般に擴充さるべきものである。聲と聲の調和は心と心の調和となり、心と心の調和は人と人の調和となり、人と人の調和は學級生活、學校生活、社會生活の基礎をなすもので國民教育上極めて重要なものである。

第四章 音樂的訓練

(一) 唱 謠 指 導

音楽教育の將來への伸展は、國民的自覺に立つて、豐潤な國民的情操と、高潔な音樂的品性を目指す音樂的訓練に待たねばならぬ。音樂的訓練は唱謠能力、鑑賞能力、音樂的直覺力の陶冶と音樂的態度の訓練によらねばならない。音楽教育の種々なる作業の中、最も重要性を持ち従つて指導作業の大部分を占むるものは唱謠指導である。歌曲の眞の價値を體得するには、只聽くことのみにては不充分で、歌ふ技術の學習により初めて其眞髓に觸れることが出来るのである。特に美的價値の高い立派な作品であればある程、この體驗なしには眞の理會はなし得られないのである。小學校に於て音樂的職業教育をなすにあらざる唱歌科に於ても、尙歌ふことの重視される所以もこゝに理由があるのである。唯「歌ふことを得しめる」とは單に平易なる俗謡歌謠を歌ひ得る能力を得しめるの意ではない。こゝに「歌ふことを得しめる」ところの理由を明瞭にしなければならぬ。音樂意識の向上は音樂的勞作即ち唱謠活動に待つところが極めて多い。文化の向上につれて音樂の伸展も日毎に進みつゝある。最近改訂された文部省の「新訂尋常小學唱歌」を見ても、從來のものとは著しく程度が高められてゐる。これ等の歌曲を十分理解し、完全に學習する爲には今までの唱謠能力を以て満足することは出来ない。更に一段程度を高めて訓練しなければならぬ。従つて樂譜に表はされた符號や記號等を十分研究すると共に其理會に務めねばならない。

リズムに對する訓練は音楽教育に於て最も根底的のものであり、歌曲の根幹をなすものであるが故に、これが研究と其訓練は最も大切なものである。然るに餘りに根底的なるが爲に、往々解りきつた事として等閑視される場合が多い。即ち拍子とリズムを混同したり、音程の訓練に没頭してリズムに關心を缺く様なことがあつてはならない。歌曲

には其歌曲特有のリズムを有してゐる。この特有のリズムの味は歌曲全體の根底的な感情的要素となるものである。故に唱誦の指導に於ては其歌曲特有のリズムを正しく精密に考察して歌曲の根幹を正確に認識しなければならない。

リズム訓練に於て最も不注意に取扱はれてゐるのは「休符」である。休符は唯單なる休として單に息つぎの如くに考へてはならない。休には休の重要な意味と價值とを持つものである。リズムは單に樂音の繼列のみではなく、休即ち空間をも含めて完全なものとなるのである。コフカは「樂譜面を眺めた場合に於ては休止はリズムの一つのめじるしではあるが、本質的なめじるしではない。意識の中ではこれが無として知覺されるのであるが特に強く現はれるリズムの場合には休止に於て屢々まきに来るべき刺戟に對する期待が起るのである」と。この期待と想像が次に來る音繼列の美を一層美しくするものである。無は單なる無ではなく無の開示によつて有の存在の意義が明かになり、無と共にある有こそ眞の存在意義を有するのである。リズムはこの意義深い無を包攝してゐるのである。又音繼列の中にはさまざまその繼列を中絶する様な休は一種の力強さを感じしめたり緊張を齎らしたりする。かくの如く歌曲の中途に來る短い休は其他色々な効果を現はすが、終止に於ける長い休は又今までの美しい旋律を一層美しくし、完全な大團圓を心ゆくまで味はせるものである。餘韻爛々と言ふ氣持はこの空間によつて味はれるものである。故に終止に至るまでのリターンやポーズ等は十分慎重に取り扱はねばならない。

和聲的關心は音樂の初歩の段階に於ては殆ど起らないのが普通であるが、音樂の發達につれてその要求が起つて來る。小學校に於ても音樂的意識の未だ發達せざる低學年に於ては和聲美の理會は困難であるが、漸次精神生活音樂生

活の發達に従つてこゝに關心を持つ様になり、又關心を持たせるべく指導する必要がある。音樂を單なる娯樂と見ることから脱して、魂の陶冶に役立て様とする以上、完全な姿に於ける音樂の理會が必要である。こゝに和聲的要素に對する關心を必要とする理由があるのである。眞の價值ある音樂は何れも和聲的要素を多分に保持してゐるので、従つて和聲的關心なしには其音樂美の眞の價值を體得することは出來ないのである。然るに従來の音樂教育に於ては旋律リズムの訓練に比して和聲的訓練は極めて貧弱であつた様に思はれる。日々に進み行く日本文化の建設に參與する音樂の發展性の上から見ても、將來の音樂教育に於ては和聲的訓練が極めて大切であると言ふことが出来る。

基本練習の必要なることは今更言ふまでもない。音樂の深き理會は技術的訓練に待たねばならないことは前に述べたが、この技術の體験に極めて必要なるものは其基礎訓練である。基礎訓練たる基本練習は音樂能力の如何なる段階に於ても必要なるもので、初學者から専門家に至るまで常にこの練習を怠つてはならないものである。勿論兒童心身の發達程度に應じ學習方然上の程度や形態に相異のあることは言ふまでもない。然るに音樂教育の目的が音樂的品性の向上と國民的情操の陶冶にある故を以て基本練習を輕視するが如き事は誤である。この確實なる基礎に立つてこそ眞に其目的を達成し得るのである。

(二) 鑑賞指導

音樂的能力は單に唱誦のみによつて伸展するものではない。唱誦の反面には必ず鑑賞が考へられねばならない。鑑

賞は又唱詠と切り離して考へることは出来ない。鑑賞によりて唱詠能力が進歩し、唱詠を待つて鑑賞能力が發展するものである。鑑賞教育の叫ばれる理由もこゝにある。鑑賞教育を單にレコードを聴かせることゝのみ解してはならない。これも一つの作業ではあるが、只聴かせて児童思ひ思ひの想像をしてゐるだけでは指導とは言へない。児童の持つ鑑賞能力を一段づゝ高め深めて行く作業が必要なのである。然して正しき音楽の正しき理會に導くことに於て始めて鑑賞指導と言ひ得るのである。これは又児童の主觀的個性を普遍的個性にまで導く事であるとも考へられる。故にこの鑑賞への導きに於ける指導並びに訓練が極めて大切なものとなるのである。

鑑賞指導にあつては前章に述べた如く美的態度に於て、音楽の眞生命に觸れ其美的價値を體得すると共に、批判的態度によりて其價値を批判評價してよりよき音楽の遂求に進まねばならぬ。學校に於けるが如く常に指導者の許にあつて學習する場合には邪惡な音楽に親しむ機會は殆ど無いとしても、將來社會に立ちて各種の社會音楽に接する時、これ等音楽の正しき價値批判を誤らざる様其礎地を培ふ事が極めて大切なことである。常に正しき品格の高い音楽に親しみ、これを眞に理會し愛好する働きはやがて其人の人格を高潔にし、情操を豐潤ならしめるものである。

近時社會の進展に伴ひ、音楽の形態や内容の上に種々様々な傾向が表はれてゐる。これ等各種の音楽を正しき鑑識眼によりて批判し、官能的な享樂に陥ることなく常に純美なる藝術生活を擴充することは將來の國民生活の上に極めて大切な事である。

(三) 直覺力の陶冶

唱詠鑑賞の音楽的能力の陶冶に役立つ最も基礎的な力は音楽的直覺力である。音楽的直覺力とは音楽的美的直觀に於て音響列の關係構造を正確に把握し、其美的價値を體認し、美的享受を可能ならしめる原動力である。音楽美の本質は前述の如く論理以外のものである。論理的説明が如何によく其本質を説明し得るにしても、結局説明以上に出ることは不可能である。論理の世界の外に實在する音楽美の本質は美的直觀によつて體得するより外に道がないのである。勿論論理的説明はその本質を指示するに役立つものであり、音楽指導に於て缺くべからざるものではあるが、説明されるものは説明された本質であつて本質そのものではない。この眞の本質の體得に至る力としての直覺力の陶冶は音楽教育上極めて大切なものである。

直覺力の陶冶は單に論理や説明によるばかりでなく、指導者の體験をそのまま直接に児童の心に移して其發展を促進することが必要である。心と心の感應は論理の介在なしに成立するもので、我々の藝術的感銘はこれによるものである。指導者の勞作體驗過程はそのまま児童の勞作過程となるもので、この指導者の正しき勞作過程は、やがて児童の勞作過程を正しく方向づけるものである。故に作品に對する指導者の態度は、児童に教材を提示し指導するに當つて先づ自ら其作品に對する正しき勞作體驗をなさねばならない。音楽の學習が指導者の如何によつて其結果の上に著しく相違するのはこゝに理由があるのである。即ち指導者は先づ自己の「行」を通して児童を行ぜしめるものでな

ればならない。心を以て心を導く魂を以て魂を動かして行く指導に於てこそ音楽美の體得がなし得られるのである。

(四) 學習態度の養成

音樂學習の態度が如何なるものであるかは前章に於てのべたのであるが、この態度の養成は音樂的能力の陶冶と共に極めて大切なものである。とかく技能科に於ては知識技能の修得に没頭して、學習態度が輕視され勝ちになるのは誠に遺憾である。知識技能の修得と共に學習態度の訓練が極めて大切であることを忘れてはならない。音樂美の體得が美的直觀の態度に於て眞剣な内面的自己活動によつてのみなし得られるものであることは前述の通りであるが、この内面的な音樂的勞作は、小さな自己のはからひを捨て、まづ指導者の訓練に心から従ふことから始められねばならぬ。歌曲の眞生命に觸れ其核心を把握し得ない兒童は、歌曲の生命の體現者である指導者によつて初めて其歌曲の眞髓を理會し得るのである。故に音樂學習に於ては歌曲と指導者とが別々にあるのではなく、歌曲は指導者によつて眞意義を發揮し、指導者は歌曲を通して教育してゐるので、指導に當つて兩者は全く一として働きかけるものでなければならぬ。この眞剣な働きかけを受け容れる爲には、兒童も亦眞剣な態度でなければならぬ。全身耳となり全心意をこれに集注して總てを受け容れんとする態度でなければならぬ。この態度の養成は再現藝術としての音樂の學習には最も根本的なものであり最も大切なものである。

日本體育の進むべき道

第一章 體育界の反省と現状

體育が教育の一分野を擔當するものである以上、體育は全人格陶冶の一機會でなければならぬ。故に教育の狙つてゐる凡ての目標は同時に體育の目標でなければならぬ。近時教育界に日本精神が高調されるのを契機として、體育の目標も日本的に潤色される事は強ち時代思潮に迎合するものとして非難し去り得ない根強いものを感じるのである。今日の體育が何を目標として行はれてゐるかを考へて見た時に甚だ淋しさを感じずには居られぬ。明治以來西洋から傳つた體育思想を繼承し、否その精神さへも忘れられて唯情性的に形式的な運動をつゞけて居るか、或は反對に唯新しいからと言ふ理由で批判もなく無暗に西洋の新體操を取り入れて以て得意とする輩を往々見るのである。或は技術の末にとらはれて本義を忘れ理論に走つて實踐の伴はない者等現今の體育界は暗中摸索の状態にあるのではなからうか。ニールスブック一度來朝するや彼の基本體操を知らざれば體育を語るに足らずとなし、日本精神高潮さるゝや武道を爲さずんば日本の體育なしと斷ずる等、節操なき徒輩の多き事に撫然たらざるを得ないのである。

(一) 體育の過去と現在

明治の初年以來西洋文化の輸入と共に種々なる形式の體育が入つて來た。之を學校體育に採り入れたのは明治十一

年體育傳習所が設けられて以來である。其の後日本の體育研究者に依つて巧みに日本化されたのであるが、瑞典體操獨逸體操或は米國のもの英國のもの等種々採用されて形式も一樣ではなかつた。それが統一の必要に迫まれ大正二年初めて學校體操教授要目が公布され、茲に體育らしい體育の基礎が出来たのである。要目は瑞典主義に依つて、國內に發達せる材料を精選統一し、諸外國の材料もこの主義に叶ふ限り採り入れ一系統の完成を見たのである。これは我が國體育の發展史上特筆さるべき功績であらう。次いで時代の進展と競技運動の異狀なる發達に伴ひ、大正十五年學校體操教授要目を補足改正し以て現在に及んでゐる。此の要目を見るに體操は瑞典主義を中心とし獨逸・米國のものを取り、競技は米國、遊戯は英國のもの等、世界體育の長所を撰び以て完璧を期さんとしたのである。

斯かる制度の下に二十幾年間行はれ來つた我が國體育は實に長足の進歩を遂げ、國民體位の向上も見らるべきものであるは諸種の統計に依り明かなる所であり、此の間に於ける體育家の努力は多大の功績あつた事は否まれない。然し此の實績あるが故に從來の體育が完全に理想的に行はれたと見るは至當ではない。要目體操が漸次一般に普及されるや毎日大同小異の體操を行ふ事となり、その眞精神は次第に忘れられて形式のみが残り、何等興味のない無味乾燥なる體操が其處此處に現出したのである。兒童は體操よりも自由に遊ぶ方に興味を持つ様になつたのは無理もない事である。この劃一的惰性的な體操に慨嘆し、覺醒せんとした多くの體育家の爲め現在では大いに開發されたとは言へ未だに舊套を脱し得ない教育家も少くない。

幸ひに甦生して生氣あり活氣ある體操を行ふ者に於ても體操の本義を忘れたるものが少くない。體育即技術と考へ

正確なるフォームにて巧みに技術を行へば體育の能事足れりと爲す者である。年齒未だ至らざる小兒に、程度の高い體操を行はしめ、或は二三の兒童に毎日々々日暮るまで競技を強要し、唯單にレコードの上つたのを見て體育は向上せりと言ふが如き體育の邪道は、今日尙到る所に見られる事である。彼等は熱心の餘り體育の本義に悖りたるを省みる暇もない哀れむべき存在である。この結果は兒童の運動競技、對抗試合等に於て、その缺點を往々暴露するのである。勝たんが爲めに惡辣なる手段に出づる行爲を見る時、何が爲めに體育を爲しつゝありやと疑はざるを得ない。

今一つ過去體育の缺陷を指摘するを許されたい。これは單に體育ばかりでなく教育一般の通弊とも言へやうが、學術が進歩し研究が科學的に行はれる様になる反面實行の之に伴はない事である。體育の現状についてその缺陷を詳述し、その理想を説き、新説に次ぐに新説を以てし、理論に於ては今や完全に近からんとしつゝある。然るに事實毎日の體操は理論に遅るゝ事數段階の憾があるのである。然るに尙口を開けば高踏なる體育理論を語り、語らずんば體育家としての體面が維持されないとさへ思はれるに至つては笑止の極みである。

私は今過去の體育について、大體三つの缺陷を擧げた。何等の熱もなく又指導の目標もなく惰性的に行はれてゐるものこそは全く救済の餘地はない。次に大いに努力してゐるも指導の方法と目標を誤りたる者はその熱誠に依り、何等かの形式に於て兒童に與へられる精神力に偉大なものがある事を認めねばならぬ。然しその不當なる事は論ずる迄もない事であるから體育の正しい認識を得るに及んで正道に導かれ得る事を考へ、大いに反省せねばならない。最後に體育の新理論に卓絶するも何等見るべき實績なく、徒らに机上の空論を唱へる者に於ても、その理論が正しい限り

世の體育家に大いなる刺戟を與へる場合も少なくなからう。斯かる現時に於て、その名が世に現はれずとも、汝々營々として兒童保健の爲め研究に實地に努力を惜しまざる人の姿は何と尊いことであらう。かゝる人こそ眞に體育の正しい實績を挙げ得る人であると思ふ。

(二) 最近に於ける歐米新體操とその影響

昭和六年の秋、丁抹の愛國的體操家ニールスブックが來朝し、日本各地に於てその實地を行ひ、斯界に羨望と渴仰の渦を残して以來、我が國の體育家は所謂新體操なるものに着目し、之が研究に全力を傾倒する事となつた。次々と北歐の新興體操は矢次早に紹介され、我々はそれ等の瞥見にさへ暇のない有様であつた。今日漸く一段落を告げ、日本精神の強調されるの秋、之が整理同化の必要に迫られたのである。

この間に於ける體育家の動搖は著しいものがあつた。極端に過去の日本體育を輕視し、或は直ちに要目の改正を要望する等所謂新體操の名に幻惑された事も少くなかつたのである。

「體育を以て國民精神の作興に資す」の一言は非常時日本體育の標識である……中略……然るに世の淺薄なる分子は新らしきを求める事急にして、自己の使命を忘れたる者が甚だ多い。……中略……ニールスブックの來朝あの華美なる宣傳體操の結果は、時こそ至れりと淺薄體操家の擡頭となつた。一に連續二に連續、盲目的不合理なる連續體操に現代の學校生徒兒童は全く犠牲となりつゝある。……中略……我々は何處に、學校體操に一貫した

精神があるか分らぬ混頓たる現状を見せられてゐる。(國部農夫氏)

然し外來の主義の或るものの中には探つて以て我國體育に貢獻すべきものも少くない。最も日本とその國體なり、國民性なりを異にする外國のものなる事を先づ念頭に於て吟味すべきである。今綜合的に之等新體操の持つ主張の一部を概観して見よう。

○自然的 我々人間は自然物である。故に從來の科學的解剖的な體操を排し最も自然な形に於て體育を實施しやうとするもので、自然動物の運動を基としたものや、又自然物を利用し、或は裸體を尊重する等のもの。

○律動的 律動即ちリズムの解釋に依つて諸説あるも、從來の斷片的直線的なる瑞典體操に對し、リズムに依る體育の效果の増進と情操陶冶に資さんとしたもの。

○全體的 部分的分析的な體操より、全身的综合的な方法に依り効果を擧げんとするもの。

○振動的 彈力の利用、體の振動彈力を利用し、力の經濟的使用に依り効果を大ならしめんとするもの。何れを見ても體育の方法原理として主張するもので適當に採り入れるならば、體育効果を大ならしむる上に價值あるのみならず、我國の體育理想を忘れざる限り探つて以て從來の劃一的斷片的なる我國體操に生氣あらしめる事は必要な事であらねばならぬ。最近大いに活眼を開き、この方面に留意して體育の新生面を開きつゝある動向の見える事は欣快に堪えぬ。この點に就いては後章に詳述する。

第二章 我國古來の體育とその精神

(一) 武道の眞髓

我國古來の體育として武道がある。武道は我國獨特の發達をしたものであつて、日本精神の影響を受け且又日本精神を産み出しつゝ發展したもので、その昔武士が主君の爲め、身を挺して働く爲めに日頃から心身を練磨したものであるから、日本精神の體育的表現と見る事が出来る。

茲に武道と言ふも武術と言ふも差支へはないが、單に術の末に囚はれた時にその劍は邪道に陥り惡劍となるのである。これに反し術至つて奥儀を極め魂は鍛へられて眞精神を體得した時には破邪顯正の劍となり降魔の劍となるのである。故に一道の達人がその弟子を薰陶するや、單なる武術ばかりでなく行住坐臥凡てに亘り心膽を碎いて人間教育を施すを念としたのである。

眞の武道は術を練つて精神を掘り下げ、精神を鍛へて術を長ぜしめ、兩々相俟つて價值あらしめる道であつた。武道のみに限らず、古來日本に於て道と稱せられるものは皆同じである。書道然り、茶道華道然り、茲に全人格の教育が行はれ、生活の規範を見出し得たのである。かくして養はれた精神力が萬古不滅の武士道を築き上げ、日本行とし

ての強い實踐力を産み出したのである。正義を守つては百萬の敵をも怖れず身命を賭して之に隨ひ、過つて不正を犯せば従容としてその責を負ふ所ものは武道の賜多き事を感じるものである。さまで學問を知らなかつた鎌倉武士が美しい日本武士の精華を發揮したのは、武道が眞に全人教育殊に魂の練磨を目標の中心としたからであらう。

(二) 武道練磨の方法

武道の目標が精神力を鍛へるにある以上その練磨の方法はあくまで鍛練的であつた。茲に目的原理と方法原理とは一致の姿を現はしてゐたのである。困苦に堪へ、缺亡を忍び、聊かも遊惰怠慢を許さず、一舉手一投足と雖もその目的に背馳する時は嚴格峻厳なる矯正を受けたのであつた。茲に魂と共に肉體の耐久力、適應力が養はれ強い生命力が培はれたのであつた。古來の英雄豪傑が武道を修める爲めに受けたる薰陶は皆斯くの如きものであつた事は吾人のよく見聞せる所である。

彼等は眞の武士になり、主君に對してお役に立ち申す爲め、あらゆる困難と戦ひ萬難を排して武道を練つたのである。主君の爲め、即ち忠の道を全うする爲めと言ふ根本信念が明確に把持されてゐたのである。(茲に言ふ忠の觀念は今日言ふ忠とは異なる所ありと雖も、その内面的な精神の働きに於ては何等變りはないのである。)この事は今日の教育の上に再考すべき大なる問題を與へる。目的手段の一元的見方は我國に於て古くより實踐し來つた所のものである。

又その方法は決して親切丁寧なるものではなかつた。一流の達人がその弟子を訓練するに於ては、弟子自らが自覺

的に研究するに非ずんば破門を申し渡したものである。故に之を習ふものは鋭意専心自ら學んだのである。しかも奥儀に達するには多くは直覺的な悟りに依つたもので、指導者は多くその精神方面を重視して訓練し、技術は習ふ者自ら研究したのであつた。かゝる態度の稽古であればこそ修めたものは眞に理解され、敵刃の下にあつて能く日頃練磨せし結果を表し得たのである。

以上述べ來つた事より考察するに、我々は茲に三つの教育指導原理を發見する。即ちその一は全人陶冶であり、その二は目的手技の一元的見方であり、その三は自學自習の態度の養成である。

(三) 現時の武道

叙上の如く力強く美點長所を有する武道が今日體育の一分野として、西洋思想の洗禮を受けて存在する姿は如何なるものであらう。中等學校に於ては最近之を正課として取入れる事になつた。體位の上と言ふ點から見ても、又日本精神の涵養と言ふ點から見ても甚だ喜ぶべき事である。唯これが實施に當つては武道の術を學ぶに非ずして、あくまで武道の精神を體得する事を學ぶ者に自覺させねばならない。今後益々正しい實施の研究が積まれる事を切望する次第である。然し乍ら、他のスポーツと同じく學校を代表する選手があり、古來の武道と比較する時多分に競技的色彩が濃厚である。競技的になればなる程その精神が忘れられ、技術の末に趨らうとする傾向があるのは止むを得ない事とは言へ、勝たんが爲めに「全く唾棄すべき卑怯なる態度さへ屢々見せつけられる」(薄井祐二氏)に於ては、日本

精神の強調さるゝ今日斷然反省して、かゝる態度の絶滅を期さねばならない。この事は今日の武道に於てさへ見らるゝ事、まして他のスポーツに於てをやである。勿論勝つ事を目標として練習し試合するは結構な事で、この精神がなくなればゲームは全々無價値となり、技術の退歩を來し、ひいて體育の精神或は効果をも没却してしまふに至るであらう。要は定められたる規則を正解し、實力を以て正々堂々と戦ふべきである。

武道練磨の精神は、現時の軍隊教育にその面影を偲ぶ事が出来るのである。軍隊程實行力に富むものはないであらう。信ずる事、命ぜられた事は斷乎として徹底的に實行する。幾多變事に際して驚異的な實力を發揮し、日本軍の向ふ所敵なしと世界に恐れられる所以のものは蓋し偶然ではなく、その日常に於ける教育が嚴格徹底的にして、あくまで鍛鍊的である事は古の武道のそれと相通する所のあるからであらう。

然しながら之を直ちに學校體育の中心とせよと言ふのではない。學校體育はその對象が軍人と異り發育の各段階、伸び行く方向の各異る男女を對象とする以上、軍隊の特殊的要求に對し、一般的要求を滿す様組織されなくてはならぬ。

第三章 日本體育の進むべき道

(一) 日本精神に依る目標の樹立と實踐

私が茲に言ふまでもなく體育の理想は正しき精神を持ち、健康なる肉體を所有する人を作る事であり、健康への道がその最も特殊なる任務である事は明らかである。然して健康を獲得する上に於て、發育の助長、姿勢の矯正、調齊度の訓練等缺くべからざる視點の存する事は既に一般によく理解されてゐる事であるから、茲には特に左の諸點について強調して見たいと思ふ。

國家への奉仕 體育が保健への道を迎へるものなる事は自明の理である。然して、何故に健康を得るの要ありやと言へば、個人の生活を圓滿幸福に遂行し天壽を全うするにあると言ふは、西洋の個人主義に依る體育の見方である。少くとも我國に於ては個人主義の見方を排して國家への奉仕を念とせざれば教育の價値はないのである。然してそれが我國に於ては個人を最高最大に發現させる道なのである。故に我國に於ては國家へ絶対歸依して奉仕する所に個人は最大に生きる道が存するのである。

乃木將軍の幼時は體質頗る弱く、又些少の事にもすぐ泣き出すと言ふ程意志も薄弱であつたらしい。この有様を見て、父君希次氏のお嘆きは殊の外であつた。父君のお嘆きも無理からぬ事、弱い我子を強くしたいと思ふは親心だ等と共鳴するのは當つてゐない。希次氏の次の嘆聲は明瞭に氏の胸中を物語つてゐる。「これでは主君のお役に立つ事も出来ない。不肖者だ」と。これ身體を頑健にし、精神を剛毅にしやうとなされた目的は全く君國への奉仕を全からしめんが爲めであつた事が分る。日本精神として我々國民が體得すべきものの中、これ以上のものはなく又なければならぬ必須の中心原理である。この原理を離れて日本教育はない。主として健康への道即ち身體を保護鍛錬する體育

も亦この原理體現を念とせざれば我國に於ては存在の理由が發見されない。學國一致の必要が叫ばれてゐる今日及び將來に於て國家への奉仕の觀念養成は唯一絶対の事項である。又國民保健の收得される事はその體力と實踐力を増す事となり、國家の發展、國力の充實の上に偉大なる原動力となるものである。この故にこそフオン・ヒンデンブルグは「體育は市民の義務であり祖國に對する奉仕である」と言つてゐるのである。

この精神を涵養するには、主我的傾向を剪滅し、喜んで己が屬する團體に犠牲となり得るやう誘導する事にある。これが實踐は體育に負ふ所甚だしい。殊に團體的運動中の競争遊戲、球技等は絶好の機會である。帽子取りに於て味方全體の爲めに犠牲となつて眞先に敵中に飛び込み、味方の氣勢を擧げ、攻撃力を増さしめて勝利の素因を作れば自分は仆れるとも結局は自分等の勝になるのである。又排球に於て、敵を直接攻撃し、美事なるプレーを演じて觀客をうならせるものは前衛中衛である。後衛は敵の攻撃を防禦し、前衛中衛に球を送つて彼等の攻撃を助くる至つて見榮えのせぬものであるが、この後衛なくてはチームとしての統一は保たれない。斯く團體への犠牲は一見個人の没却の如くなるも決してさうではない。又かく考へれば個性の自由性を認めないが如くに見ゆるも然らず、返つて個性の尊重となるのである。蹴球或は籠球に於てよくシュートする者の蔭には必ずよく働いてチャンスを作る者があるのである。若しチーム中の誰もが自分でシュートしやうと考へたら、結局味方の衝突となり、自分の望んだ所をも爲し遂げられない事となる。故に團體競技の指導に際しては、蔭となつて團體の爲めに働く者を大いに稱揚し、陽となつて誇る者の奢りを誡め、團體の爲めに奉仕する精神の美しく且正しい事を説き、結局それが最後の勝利を齎らす事を理

解せしめ、習慣性となせば、國家への奉仕の念の基礎を作る事が出来るであらう。尙兒童生徒に對し、常にその怠慢等に際しては、「それでお國の役に立てるか」と説諭して、國家觀念を旺盛にするの必要がある。

實踐力の啓培 文明は極度に進んで、あらゆる方面に研究の手が延びたと言ふも過言ではなからう。勿論學問の研究には際限のない事である。如何に研究されやうとも盡きる所はなく、又新しい研究が如何に尊いものであるかの幾多の實證を見せつけられて來ただけで、我々はそのかげに大いに反省せざるを得ない一面ある事を信じて疑はない。實踐の伴はぬ理論、議論の爲めの議論などはその一例である。現今一般の教育界に於いても、理論の研究は大いに進んだが、その實踐の遅々たる現状を見て益々その感を深くする。體育界等に於ても、立派な理論を吐く割に實績擧らず、一つの研究の結果を實際に立證して見ないうちに次の新主張に釣られてゐる等の現状は如實にこの反面を物語つてゐるものと言へやう。「言擧げせぬ國」として、古來理屈よりも實行を重んじて來たことを合せ考へると猛省すべき時機に立つてゐるのである。研究はぐんぐん進んでゐるのに實際がこのぐんぐんと後れてゐては、切角の研究も眞の價値が發揮されない。我々實際家としては、新しい研究は暫くおいて、先づ實踐に努力をするのでなければ新らしさうな事を言ふ資格もないと思ふ。この風潮が子供の心にまで沁み込んでゐる事は恐ろしい事だ。現代の青年が意志薄弱にして實行力に乏しいとの非難を受け、殊に學校卒業者にその非難の多い事はもつとく體育に於ても實踐力の啓培に力めねばならぬ事を教へるものである。この實踐力は何から齎されるか。鍛へられたる魂と肉體の發現であらうと思ふ。そこで實踐力を陶冶せんとすれば、魂と肉體を鍛へるより外ない。往昔の武士が果敢にして決斷

力に富み、現時の軍人が勇壯世界無比と稱せられるものは全く偶然ではない。

兒童心理の尊重はもとより教育の一大原則であらうが、今日の教育は尊重を越えて、兒童への迎合となつてゐるはないか。この迎合こそは彼等の魂と肉體を脆弱ならしむる最強の糧である。かくて教育されたる國民が果して明日の日本を安全に支へ得るだらうか。眞に國家の爲め子供の爲めの教育は目前の兒童の表面的な要求を満足させる事のみではなく、より高次の觀點より、時には兒童の要求に反しても、彼等に強制する事は當然にして必須なる要件であらねばならぬ。

この故に鍛鍊的な教育は認容さるべきである。私が體育に於て鍛鍊的でなければならぬと言ふのはこの理由に據る。そこで體育に於て魂と肉體を鍛へる事が考へられねばならぬ。勿體體育に於ける對象が兒童や女子である場合に於ては、合理的な理由に依る緩減が顧慮されねばならないが、一面に於て眞に肉體耐久力を増し、堅忍不拔の實踐力を養はうと思へば、現今行はれてゐる生理解剖的な保護を主とする體育は改めねばなるまい。生理解剖を基準として兒童を温室に育てる如き體育に依つても兒童の肉體に病魔の宿らぬ事は出来る。然し病氣にならぬ體、或は長壽を保つ體を眞の健康と言ひ難い。事に處して働く上に充分活動し得る肉體と精神を有する事が眞の健康と言ひ得るのである。そこで一つには體育的實力を養成する事が肝要である。體育的實力とは、肉體的な力、肉體の支配力、健康度均齊度等であつて、轉廻、倒立、跳躍、平均、懸垂の諸運動及び遊戲、競技、球技等の技能の巧拙はその實力の發現形式である。で之等の指導に當つては從來の如く技術の向上を計らねばならぬが、從來看過してゐた事は力量の問題

である。例へば尋六教材斜開脚跳をするに當つても、そのフォームをよくする事に専念し過ぎて跳躍の量を度外視した傾向があつた。勿論フォームを正しくとの要求は肉體の支配力即ち巧緻性の陶冶に與つて力あるものではあるが、それと同時に或はそれ以上に跳躍の量を考慮して指導せねばならない。一々の教材について説明する事は煩に堪へないが、機敏正確力量の三點は並進的に養成さるべきものである。又力量も力と時間の兩方面の指導を忘れてはならない。かくて耐久力は生じ有事の際に合ふ身體を作る事が出来ると言ふべきである。

次に實踐し得る肉體は出来てもこの身體を充分に利用し得る精神の啓培を忘れてはならぬ。負けるから、出来ぬから、怖いから、面倒だから、恥しいから等と言つて特殊の體操を止める事は許容してはいけない。勇躍難に赴くの精神を實地に練磨し實現せしめ得る教科として、體操程適當なものはない。少し苦しいからと言つて休み、一寸怪我をしたからと言つて止めるのでなくて、何くその精神でやる様に指導して行きたいものだ。

之等肉體及び精神の實踐力を増大する上に體操の上に殊に力を入れるべきは懸垂、平均、跳躍、倒轉、遊競技等の應用體操の指導である。勿論之等の指導に於ては身體を鍛へる所に精神が練られる様即ち身體と精神とは一元的見方に於て取り扱はねばならぬ。從來の缺陷の一つは肉體と精神を切り離して考へられた點にある。(この點については次項に詳述する)應用體操の取扱ひに當つては技術と量と、精神を一丸とし、指導順序を考へ、易より難に漸次程度を高める事により、自信力と決斷力を培ひつゝ進むべきであらう。

全人格陶冶 體育即ち身體教育の意味を再考し、之が全人間性の陶冶の上に重大な地位を占むる點を明確に

したい。身體教育の身體とは何か。立場に依つて色々の見解が下されやうが、身體を自然界の事物と同じく一つの物とするもの、人體を一個の生物として眺むるものとは共に自然科学的な根據に依るものであつて、從來の體育には原理として之に依據したものも少くはない。解剖學、生理學、心理學、衛生學等に根據を持つ體操は之に屬する。之等諸科學がそれ々の立場に於て人體を分析する事に依つて、次第に人體の眞の姿と遠ざかつて行く點を見ねばならぬ。人間は他の生物と異つた生命即ち魂を有つ靈的存在である。然して靈と人體とは不可分の統合體として人間を形成する。茲に人體とはその内在する生命の主體即ち靈の顯現様相である。即ち人體を心身未分の統一體として全體的に見て行く立場がある。この立場こそ體育が單に肉體の訓練と墮する事を阻止する唯一の原理ではなからうか。凡そ如何なる運動もその内的生命の顯現でないものはない。身體の意味を斯く考へる時その教育が全教育と乖離すべきものであつてはならない事は言ふまでもない。勿論他の教科に於てもこの事は言へるけれども、體操に於て特に重大な意味を持つことは前項に述べた通りである。

昭和七年ロサンゼルス國際オリンピック大會に於て、我が竹中選手が残せる美談は、彼に内在せる日本の精神がスポーツの姿に於て顯現されたのである。又二宮文右衛門氏の文中に、「僅か一ストロークで必ずそのセットを勝ち得る事が明らかである。然し敵のプレイヤーは體の平衡を失つてコートに顛倒してゐる。之に止めを刺すは死人を斬ると同じである。彼は極めて緩徐な速度の球を敵のコートに送る。敵は感謝の瞳を輝かしつゝその球を故意にネットする。球を送る者、受ける者、更に之を見る數萬の觀衆等しく潺々として盡くるなき人間性の最高潮に大乗的感激を萬

喫する。プレーヤーのこのフェアプレーこそ彼等の内的精神の一の身体的顯現様相である……」とある如きは、體育が眞に人間を陶冶してゐる事を語るものである。グルクローズが「音樂教育に於ては、音樂家を作る事が急であつてはならぬ。音樂家以前に先づ完全な人とならねばならぬ。音樂教育も末梢的な技術の教育が最初であつてはならぬ」と言ひ、ボーデが「一切の體操は身體的であると同時に靈的でなければならぬ」と言つたのはこの點である。從來の體操が身體を一の生活體と見たに對し、身體を生命體即ち人格統體の顯現様相として見る事は今後體操の重大な着眼點でなければならぬ。

日本武道の精神も其處にあつた事は前に述べた。茲に體育が全人間性の陶冶に重要な地位を占めてゐる事が明確となる。殊に道德の實踐としては體育は絶好の機會である。學級擔任者が體操を擔任せねばならぬ理由が茲にある。道德のみならず美的素養の體得も期せられねばならぬ。近時リズムと言ひ、行進遊戯の流行と言ひ、共に魂の美に對する感受性の陶冶を目標の一とせるは體育として首肯出来る事である。尙特種の體育にあつてはそれが熟練の域に進む時魂は高揚せられて靈的な宗教的な魂の躍動を感じしむる事も可能である。

斯く全人的な陶冶を爲すに如何に體育を實施すべきか。目的方法は一元である。目的達成の爲め、目的に反する手段は許容されない。運動家なるが故に多少の粗暴や野卑な言動は當然であるとか、技術巧妙なるが故に成績劣等品性素行の劣悪さが少しでも許されるとすれば、それは體育の邪道を往くものである。如何に體操の技術が巧くても、器具の整理や集合解散に於ける態度が亂雑であつてはいけない。一舉手一投足に至るまで怠惰や不始末を許容すべきで

はない。故に體育の行はれる所凡てこれが機會である。然しその最も影響の大なるは應用體操であらう。應用體操に於ては犠牲、勇敢、協同公正、忍耐等の徳目が必然的に要求されるからである。故に應用體操の指導に當つては技術の外に常にこれ等の全人的陶冶について留意して行はねばならぬ。

明朗性の伸展 從來の體有が片苦しい無味乾燥なものであつた事は、兒童をして體操を嫌惡せしめる最大の原因であつた。瑞典體操及び獨逸體操を基調とし、それ等の眞精神が忘れ去られた後に残つた體操としては當然なものであつた。この束縛から體操を開放しようとの企は、教育界に個性尊重、兒童心理の尊重等の思潮が起つた頃から漸次唱道され、從來の陰鬱な體操は晴々とした自由の天地に放たれたのである。低學年の體操は遊びの善導でなければならぬとか、體操は窮屈なものであつてはならぬ。兒童が心身を思ふ存分働かせる機會でなければならぬ等々。誠にこの主張は今日の體操に生氣を持たし、兒童をして體操に強い興味を感じさせるに充分な方法であつた。興味なくして體育の効果も舉り難い。故に兒童への迎合にならぬ程度に於て兒童心理の尊重は意味があるのである。然して體操は明らかな氣分の中に氣持よく行はねばならない。

この事は前述の國家への奉仕、實踐力の啓培、全人格の陶冶といさゝかも矛盾するものではない。往時の日本人は實に明朗なるものであつた。萬葉歌人のあの直情さ、純真さと言ひ、武人の恬淡單純な氣持と言ひ、日本精神の清明心と稱せらるゝものは實に明るい晴々としたものであつた。この純情あればこそ力強い實踐が無言のうちに行はれたのである。體育に於て明朗性を益々發揮する事は大切な事である。然し茲に留意せねばならぬ事は、明朗性とは決し

て浮々とした軽薄な氣分を指すのではなくて、内に確固不動の國家意識を體得し、力強い實踐力を有しての明朗さでなければならぬ。古人の悟りの後に來る心の晴やかさとか、武士が「死は鴻毛よりも輕し」と稱して氣に掛かなかつた態度等はこれであらう。

體育に於てもこの意味の明朗性を取り戻さねばならぬ。對抗競技等に於て幸ひに勝つた時はよいとして、不幸敗戦の憂目を見た時に無念やる方なく觀衆の前をものはぐからず、嘆き悲しみ果ては相手を恨み審判に喰つてかゝる等の態度は甚だ見苦しいものである。恨を呑んで退場し悲嘆哀愁に泣くと言ふも、眞に體育の明朗性を把握せるものゝ爲すべき行爲ではない。日頃練習せるすべての技能を傾け、全力を盡して戦ひ敗れたればとて仕方はない。敗戦の恨を殘さず來るべき機會の雪辱を期して實力を練る態度が養成されねばならぬ。「勝敗は兵家の常」とか、「敗軍の將兵を語らず」等の如く、恬淡に振舞つた武將の床しさを今更感する次第である。勝つて誇らず負けて恨まず和氣霽々の中にゲームが終る様にしたいものである。

人間は活動する事に於て明快であり得る。沈滞した空氣の中に我々は朗らかさを見る事は出來ない。殊に兒童に取つて身體活動は彼等の生命である。思ふ存分動く時に彼等の魂は淨化され單純化され明朗性を發揮する。この明朗性を善導して次第に高次の明朗性に發展させる事は體育の一つの仕事でなければならぬ。今まで跳び得なかつた高さの跳箱を苦心慘憺練習の結果跳び得た後の心よさ、音楽のリズムに合せて輕快に優美に肉體を動かし我を忘れてダンスの恍惚境に浸る壯快さ等は體育ならではの味へぬ境地であらう。

朗らかな嬉々とした氣分で體育に入り、喜悅のうちに終り、その間高次の明朗さを滿喫せしめる様指導する事が大切である。この爲めには發育程度に適應せる教材を選択し、兒童の心理を尊重し、指導者が明朗な態度を取り、技術を進歩せしめる事に依る愉快さを悟らせ、適當に遊戲球技を取材する等の注意が拂はれれば、體操の時間は兒童に取つて魂淨化の機會となり楽しい修養の時間となるであらう。

體育的自覺の喚起 今更茲で自覺的學習の効能を説くの要はあるまい。健康への道に邁進する體育も自覺なくしてその効果を擧げ得べくもないのである。教師の命するまゝに無意味に手足を屈けたり伸したりしてゐるのでは體操は全く無味乾燥ならざるを得ない。又たとへ兒童が興味を持つて行つたとしても、それが單なる興味であつて體育的自覺を缺く時にはその價値は半減されるであらう。然らば體育的自覺とは何か。即ち體育する事に依つて自己の修得すべきものを理解し、自己の體格體力を知り、自ら骨折つて之が改善發達の契機を掴まんとする所に發し、自分の力で骨折つて自己の健康を創造しやうとして念々努力する事であると思ふ。その爲めには或は適當の機會に體育の知的啓培をなして體操、スポーツの眞意義を認識せしめ、或は自己の體格、性格、體力を有意的に矯正發展せしめんとする努力を重視し、一面鍛鍊的になると同時に他面衛生的方面を理解せしめねばならぬ。自覺ある體育の實施はやがて眞に體育を愛好するの精神に進展するものである。かくてこそ日本今後の體育が實地にその價値を發揮する事を得るのである。

最近我が國に於ける體育の進歩には實に目覺ましいものがある。然しこれは一部研究家のみを進歩であつて、一般

には未だ甚だ幼稚なるものがある。これは従来の體育が「體育とは何ぞ」と言ふ確固たる信念を植付けてゐなかつた事を物語るものである。英國の或る體育家がその著書の中に、「英國はこれまで競技運動の盛んな國である。體格の優秀な國民であると自負し、他國人もさう認めてゐたのであつたが、その實英國人の殆んどは唯ゲームを見ることに熱狂したり、新聞や雜誌でゲームの結果を読むのを喜ぶのが他國人よりも前から旺盛であつたに過ぎないのだ」と言ふ意味の事を實證を擧げて書いてゐるさうである。日本に於て近時一般にスポーツ熱が流行し、殊に野球など的一般への普及状態の中には、英國の轍を踏むの萌芽が見えないと言ひ得るだらうか。體育は附和雷同ではなく、面白半分のものでもなく、榮冠を得る爲めの練習でもなく、眞に人間の體位、精神を發達せしめて以て國家社會に裨益し將來日本發展の發動力として國家を盤石の安きに置く爲めの自己完成の手段であるとの自覺を體得せしめねばならぬ。

この故に指導の態度は變更されねばならぬ。指導者がさせるのでなくて、兒童各自が自ら體育する様に指導すべきである。往時の武士がその心身を練り、武術を練磨する爲めに自ら工夫を凝らし自己に適する方法を發見した努力を思へば、體育の自覺に依つて自己の健康を獲得する事はさして難事ではなからう。

體育は學校で行ふものとして、一度學校を卒業すれば一般に顧みられない現狀は實に自覺に依る體育の行はれなかつた所に原因するのである。自己の健康を創造するに衛生方面の訓練は重要なものであるに拘らず、從來やゝもすれば等閑に附されてゐた事は誠に惜しむべき事である。殊に營養、日光、空氣の三つは彼等發育の途上にある兒童より離すことは出来ない。この三つに對して兒童の認識を正しくし、且平常に於て常に注意し、衛生的良習慣を得させ

る事は、自ら體育する根本として忘れてはならぬ事である。

(二) 外國諸流派の包攝

最近北歐諸國に勃興した新興體操の主張の中には、探つて以て我國體育を利するものが少くはない。將來の日本體育を發展せしめる爲めに必要な思潮は大いに採り入れねばならぬ。然し茲に繰返し念頭に置くべきは、新しい主張を見て之に囚はれない事である。しかも舊套を固守して發展性のないものあまりに消極的である。大谷武一氏の著書の中に、ホルムスの言葉として「新らしきものを試みる最初の人となる勿れ、然し古きものを捨てる最後の人となるなかれ」を載せてゐられるのは味ふべき言である。同化する方法としては先づそれ等の精神を研究する事である。然して現今の體操をそれ等の精神に依つて生かし實施する事は今日大に行はれ最も妥當なものであらう。體育の究極目的に向つて、最も効果的ならしむる爲め取入れらるべき主張として左の如きものがあらう。

自然性の尊重 從來の體育はあまりに科學的器械的となつた。もつと人間の自然性を呼びさまし、自然的な體操が行はれなければならぬ。自然の動物や原始の人達が、その健康度に優れてゐる點に着目せねばならない。又肉體を動かす事はかりでなく、空氣、日光、服裝についての關心が欲しい。殊に都市生活者に於ては自然に歸る生活がその保健の上に大きな効果を齎らす事を忘れてはならない。野外體操、裸體體操、自然物の利用等は今後の研究に俟つべき事項であらう。

律動の重視 近時體操を語るもの必ずリズムを口にする程重視されてゐる律動の眞の意義を捕へ、意識的に體育に實現してゐる人が幾人あるだらう。少くともリズムなる語を、物理的な時間的な解釋を下して早合點した時に重要なリズムの價値は半減されるだらう。内面的な魂の感激であり生命的根元的なものであつて運動に依る靈魂の戦きとその顯現を眞のリズムと解すべきであらう。二宮氏はボーデ體操の研究中に「律動とは動植物をも含めての自然界を支配する一つの法則であり、緊張と弛緩によつて時空的に經過する生命的な流れである」と述べてゐられる、故に律動重視の體操とは、内面的な體驗、眞の理解に依るものであり、自然的生命的なものであらねばならぬ。兒童の内的活動を重視しそれに適應する様緊張と弛緩があり、喜悅感(高次の)を伴つた體操でなくてはなるまい。單なる連續の強制が眞のリズムの尊重ではない。

運動量の問題 靜的體操より動的體操へ、部分運動より全身運動へ、彈力形式、振動形式の重視等皆從來の體操の運動量の少い事に對して、一定時間内に於て最大の効果を齎すに好適な主張である。然して何れも快感を伴ふ事はこれ等の主張を益々重要にするものである。一週二時間や三時間の學校の體操時間に於いて體育効果を收める上に考へねばならぬ問題である。今後運動量と興味のない體操は最もいましむべきである。

今後の家事裁縫教育

第一章 女子教育の變遷と現代社會狀態

明治維新以前の我が女子教育は「女はくどくと智慧なきが女の智慧なり。女に學問はその要なし」と言はれて糸を紡ぐ事、機をおる事、裁縫する事が女子の重大な任務であり女子教育の重要點であつた。當時に於ては四民の上立つ武士階級でさへ誠に貧困で女子に教育させる程の餘裕のある家庭は甚だ少く、平民の子女も中には寺小屋に入り習字を習ひ、稀には算術をも學んだ様であるが、之等の子女はごく少數で「みめ形よき女房なりともその事をおろそかに存じ、大茶をのみ物まゐり遊山好きなる女房は離別すべし。」と位まで言はれた時代であつた。従つて武士の家にあつても町人の家にあつても、親のため、家のため、祖先のため、家業のため、絶対に身をさゝげたのである。すべて家族本位男尊女卑を本位としてゐた。

しかるに明治時代に入つて政治上に於ては徳川三百年の幕府が滅却され、社會上にはあらゆる階級の打破習慣の崩壞、思想上に於ける傳統的精神の滅却、舊思想の一掃等新しく打ち立てられた明治時代が新政府新社會、新道徳新思想等、あらゆる新しい文化が建設されて女子教育上にも大きな革新が行はれたのである。明治五年學制は全國劃一的に實施される目的を以て發布された。女子のためにも少數の學校が建設されたけれ共、明治二十六年文部省令第八號によれば

「普通教育ノ必要ハ男女ニ於テ差別アルコトナシ。且女子ノ教育ハ將來ノ教育ニ至大ノ關係アルモノナリ。現在學令兒童百人中修業者ハ五十人強ニシテ其ノ中女子ハ僅カニ十五人強ニスギズ。今不就學女兒ノ父兄ヲ勤誘シテ就學セシムルコトヲ怠ラザルコト」

と訓示してゐる。かゝる所から見れば女子教育に對して如何に深慮の注意が拂はれたかゞわかる。

しかるに明治から大正の半頃にかけて我國は西洋文化の影響を深刻に受け入れた。その初めに於ては女子は概して封建時代の遺習を墨守し、傳統を維持する所謂「女大學」式のもの以上に出づる事は出来なかつた。しかるに我が國民性の長所たる同化性包攝性は男子をして遂に歐米文化を十分取入れさせたと同時に女子をも從來の状態に止めさせなかつた。劣等から徐々として普及された女子教育は益々廣汎に亘り、女子の教育的地位の高まつて來ると同時に、大正の半頃よりデモクラシイ思想が勃興して男女平等度の叫びは男子の普選と同時に女子にも參政權を與へよと言ふ叫びとなり凄じい勢を以て社會に浸潤した。その結果として女子の地位の高まりつゝある事は誠によろこばしい。然し女性を家庭より解放せよの叫びは三千年來の美風を維持して來た家庭を攪亂させ破壊せしめる様な現象を頻發した。毎日の新聞に如何にこうした記事の多きかを見てもうなづけるであらう。

最近に至つては唯物史觀的な左翼運動がデモクラシイに代つて勢力を得るに従ひ、若き青少年女子の間に於て節操なき主義者が多數出でた事を見れば現代社會狀態が維新前後に比較して如何に急激に變化したかゞ理會出來ると思ふ。特に若き女子が學校卒業後家庭に止まりて家事に従事する事を厭惡し、之を無能力者のなすべき仕事なりと信ず

る者が多い。之ははたして正しい道であらうか。

第二章 眞に自覺ある女性の道

(一) 日本婦人の長所と短所

我國の婦人は過去に於ては嫁して主婦となるや、至つて謹み深く舅姑に仕へ、或は夫や子供のために自己を捧げ祖先より傳わりし家のために盡すと言ふ精神即ち「まこと」の精神を以て粉骨細身己を捨て盡し來つたものである。何事にも「目八分」のひかへ目な遠慮勝な態度、「やさしさ」「ゆかしさ」が女性の一大長所であつた。朝早くからおそくまで日夜營々として勤勞に従つたのである。我が國が三千年來「家」を中心として發展し來り、良妻賢母を以て理想とされた丈あつて妻としては勿論、母としても無比の卓越性をそなへ如何なる辛苦をもたへしのが從來の日本婦人の長所であつた。かゝる家を中心として絶對的奉仕を理想とし來りし女性が、西洋思想輸入の結果、この傳統的美質を殆んど一切なげ打つて外國流儀の婦人の權利を主張するに至つた事は、言ひかへれば日本の傳統的美質の正反對を以て現代人の面目と考へるに至つた事は、果して正道であらうか。

過去の封建時代の女性は忠誠、忍耐、勤勞、同情、協力等の徳目に對しては實に完全な資格の具備者であり保有者

であつた。それは家長中心の家族主義による結果、かくならしめたものであろうが、所謂女大學的教育の餘弊は日本婦人をしてあまりにも消極的ならしめた。日本婦人は餘りに感情を尊ぶ結果知的方面に缺けて其の生活は非能率的であり經濟觀念乏しく、家のみを念頭においた結果は社會的國家的世界的な自覺に缺けてゐた等の長所の反面には、大いなる缺點をも持つてゐた。我が國の地位が世界的となり、國際關係の多事多端な今日に於て、今日の女性の任務はますます重大となつて來た。かゝる時に在つて女子は女子の道を眞に自覺せなければならぬ。

(一) まことの心のあらわれ

日本精神の高潮魂のふるさとへの還元の叫ばれてゐる今日、我が建國の精神をかへりみて今後日本女性は如何に歩むべきかを考へて見なければならぬ。建國の精神は普通に建國の當初とのみ考へられるが決して然るべきものでなく、過去に於て建て現在建てつゝあり將來も建てゝ行くのが本義である。我が建國の理想は永久に實踐し、日本國家の價値の創造と使命の實現に勵む誠の心である天壤無窮の寶祚のいやさかえまさん事を祈る誠の心こそ萬古不朽の日本精神である。

心をこめて作れる料理の品々。布糸針に自己の全靈を注いで子女或は夫等々の衣を縫ふ母の姿。妻の姿。何と言ふ美しき姿、日本女性の姿であらう。然も夫や子女のために働く姿でありながら夫や子女のためと言ふ意識を超越した彼我一體の姿である。かゝる所に日本女性のまことの心のあらわれがある。まことの心は神人合一の精神であり、唯

「根本の精神で、何等偽や邪惡な考へを混入しない純粹無垢な精神である。天地自然の道であり、人の人たる道である。」「まこと」は行によつてのみ現實される。「まこと」は先づ自我を對象にさげ盡す所から生れる。「まこと」の心を持つて一家の仕事に當る母や妻の姿。これこそ日本女性の姿でありこの姿こそ眞にうるわしい限りである。

一家の和の中心となり夫の内助、子女教養等々、家庭には意義ある仕事が無限に藏されてゐる。之等は女中や家政婦によつて出来るものではない。「まこと」の心をさげける女性が和の中心となつて形成する家庭こそ、すべての魂の根元であり、子女教育の中心であり、道徳的生活の發端である。而して國家の單位である。

かく考へるならば家庭の破壊を以て新生活とすべきでなく、家庭内に於て責任ある人格的地位を確保する事が眞に自覺ある婦人の道、日本女性の道である事となる。

しからは女性が家庭を輕視し家事裁縫を厭惡する事は大いなる考へ誤りである事がわかるであらう。

然もこの女性のつかさどる家事裁縫が國民生活と深き關係のある事を(後章にて論じる)知る時、今後の女性は家庭にかへり家を齊へると言ふ女子の天職を従來の封建時代にみる無自覺な態度でなく、眞に自覺的創造的になす所にあり。しからは家庭婦人のなす所の消費は單なる消費でなく、作業は決して家政婦の代行ではない。その生活には尊き意義を持ち女性をして眞の幸福を見出させると共にそれが我が日本精神の體現となるものである。

第三章 家事裁縫教育の根本精神

かゝる重大な家庭の處理に當るに必要な家事裁縫を厭惡し之を無能力者のなすものと信じる者の多くなりつゝある傾向は如何なる理由によるものであろうか。

之は西洋文化のもたらしたる主智主義、個人主義、自由主義、智育偏重主義教育の影響の結果、技能教科を劣等視し、知的教科を重視した事にもあろう。又勤勞をいやしみ高遠なる理論を尊重した結果、勞作教育の缺亡にもその原因があると思ふ。なほこうした風潮にのせられた折、この科の教育者に家事裁縫が人生に對し、國家に對し、社會に對し如何なる意義と價值とを有するかと言ふ事に對して、透徹した理解及それに伴ふ確乎たる信念と、燃える様な熱意を持つ者の少なかつた事にもその一理由がある。家事裁縫が單なる理論でなく實際的現象であり細かい分野の多い教科である丈、その本質を誤り易い結果にもある。

家事裁縫に對する現行小學校令を見るに、

「裁縫ハ通常ノ衣服ノ縫ヒ方及ビ裁チ方等ニ習熟セシメ、兼テ節約利用ノ習慣ヲ養フヲ以テ要旨トス」

「家事ハ家事ニ對スル普通ノ知識ヲ得シメ家事ノ趣味ヲ長ジ兼テ節約利用秩序清潔ノ習慣ヲ養フヲ以テ要旨トス」とある。

今從來の家事裁縫教育を反省してみるに、裁縫科は主として裁ち縫ひに終り、家事科の教授が知識の傳授に傾き實際生活とは餘り關係なきものになり勝であつた。しかるに漸次概念的に家事を取扱ひ、裁ち縫ひに終始する事の非なる事をさとり、最近この科教育に於ても郷土化、生活化、地方化、社會化等が叫ばれる様になつて勞作技能方面が重視せらるゝ事となつた。

しかしなほ更に家事裁縫がその缺點とした所は、ともすれば全人的陶冶の不十分な點にあつた。即ちこの科を通して女子教育をする、將來家庭婦人となりし時「自分の事は自分でする」「自分の力によつて役に立つ働きをする、即ち奉仕的精神」「感謝報恩の念を持つ様にする」等の人間的陶冶の點にかける所があつた。家事裁縫は家庭生活に必要な知識技能及品性を陶冶し、眞に家庭婦人としての自覺ある女性を養成する事にある。「まこと」の心を持つて専心家庭生活の處理に當る婦人、よき日本婦人たる自覺ある婦人を養成する事にある。從來の日本婦人の長所たる勤勞を更に高い精神的勤勞と肉體的勤勞との綜合された所の勞作を持つて、眞に家庭婦人としての女性を養成する事が家事裁縫教育の根本的精神であると思ふ。かゝる見地に立つてこの科教育上の強調點を次に擧る事とする。

第四章 今後の家事裁縫教育上の強調點

(一) 徳性の涵養

勤勞尊重の態度の養成 我が國民殊に婦人は古來より勤勞を以てその一大長所としてゐた。糸をつむぐ事、機ををる事、裁縫をする事等の一切の家事は大昔より女性の手によつてなされた。女性はひたすら之等に魂を打ち込んで、家庭の女子としての使命をまつたうしたのである。しかるに近來機械文明の進歩、都會の惡風の傳播、享樂主義の跳梁知育偏重主義等の結果は、この傳統的美風が頽廢した。まして「小人閑居して不善をなす」の譬の如く、勤勞厭惡の惡風が幾多の惡風を生み出す事は所謂有閑婦人等の實狀の明證する所である。

こゝに於て最近教育思潮の一として勞作教育が盛んに叫ばれるに至つた事は誠によろこばしい。しかもその勞作は肉體的勤勞のみ尊重するのではなく、肉體的勤勞と精神的勤勞との調和されたもので無ければならぬ。實に現代社會少くとも現代教育の指導原理としての勞作は何處までも全き意味の人生即ち人格及文化を創造する原動力たるに價ひするものでなければならぬ。家事裁縫がかかる意味に於て眞に女性の手によつて女性の「まこと」の姿の發揮されるものであらねばならぬ。

近年デパートとかその他多數の店頭に既成品として衣類がうり出され、食料品が便利に供給される様になつた。然しそれ等のものを必要に應じて買求め飲食し着用するのと、ズロース、パンツ、ワスビース等を自己の手によりて心をこめて製作し之を着用する時の着物とははたして同じ事であろうか。後者に於ては汗のたまものとして出来上つた衣類を着用する時、決して粗末にしてはならないと言ふ氣持、こうしたものに對する感謝の念が自ら湧出し人格陶冶の上に如何に大きなはたらきをする事が出来る事であろう。

私はこんな事を聞いた。「同じ着物を着るにもこれは妻が心をこめて作つてくれたものであるのを着ると、仕立屋で仕立てたのを着てくれるのだと思ふ時と妻に對する感謝のが異なる。又一日の働を終へて家にかへり、夕飯の膳に向つた時、その料理によつて妻の心持がわかる。妻が自分のため如何に苦心をして献立をしてくれたかは一見すればわかる……」と言ふ事であつた。かかる夫のためにつくす心、又「まこと」の心を持つて家事裁縫に當る事の出来る女性を教養するためには、學習時に於て自己が作り上げた物が如何につたなくとも、自己の力にて作り上げる事の喜びを味はせ着用させる事にある。

かかる態度に於て一つの製作品も粗末にする事なく、眞剣な態度で製作する態度を養成すべきである。

裁縫 家事愛好の態度の養成 母の裁縫する膝元にて母の手つきをまねながら、針を持つて何かを縫ふ幼な子を見る。女子は幼なき時よりかかる仕事を好む。

學校に於て裁縫を課す以前から兒童はその遊戲上必要の爲に幾度か人形の着物を作りお手玉を作ろうとした事である。此の場合の兒童の作業は誠に幼稚であるが、其の仕事は兒童自身の魂のこもつた自らの力によつて成されるものである。此の態度こそ兒童がたへず進展して行くに缺くべからざるものであつて、この兒童の内から生れ出る何かを作り出さうとする欲求を善導して、常に創作的態度を養はねばならぬ。かくの如く女兒たるものはすべてが生れつき裁縫を愛好するものである。私は度々尋三の子供から「早く裁縫を習ひたい」と言ふ言葉を耳にした。

しかるに高學年に行くに従つて次第に裁縫を嫌やがる者が増して來て、女學校等になるとしかたなしに裁縫をする

と言ふ者が多数に出て来る。かゝる様子では眞に女子教育をする上になげかはいしい事である。こゝに於て常に女兒が縫裁を愛好する様に指導する事が大切である。

尋四になつて初めて學校に於て縫裁をなす兒童には、まづその心理に立脚してなすべきである。まづ簡単な興味ある教材よりはじめ、運針の必要や用具の使用法も實際に經驗して、兒童自らその必要を感じてする様に導きたいと思ふ。まづ運針々々と切角の兒童の興味もかへりみず、運針練習のみおしつける事は最初に於ては考慮すべきであると思ふ。かゝる様な兒童の心理に立脚して教材を選定し、練習をなさしめる事は如何なる學年に於ても重要點である。

次に方法に於ては運針を行ふ時には運針グラフを用ひ、一定時間の練習後その質と量を記入せしめる。かくする時には自發と自覺の態度が現はれる。そして運針に興味を起し何回も練習する様になる。

如何に小さな製作品も兒童の誠をさしげての創作物であるから、教師はそれに對して同じ誠の心で接しなければならぬ。まづ出来上つた品の良き點をほめ、不十分なる點はよく納得する様話しきかせる。かくしてこそ兒童は「この次はもう一層きばろう」との心を起させるものである。

尋五女兒の學習帳の一頁に、

題目	かんたん服		始めた日	月	日	豫定時数	時	検印	評語	保護者印
	出来上つた日	月								

出来上つたものについて

思つた通りに出来たか	出来ました	先生の批評
困つた所はなかつたか	えりつけの所が少しむつかしかった	
自分で工夫した所はどこか	えりを取りかへられる様にした	
よく出来たと思ふ所はどこか	全體よく出来たと思ひます	
わるかつたと思ふ所は	袖下の縫力が少しちぢかんだ	
お友達のもの比べてよいか悪いか	少しよいと思ひます	
着て見た感じはどうか	氣持がよらしい	
家の人はどうおつしやつたか	「よく出来たね」とほめて下さつた	

と記入されてある。かくの如く實習の結果を記入し家庭の母にもその批評をして頂く様にする時は、この科を愛好させる一方法となる其の他種々なる點、場合に於てかゝる態度の養成をはからねばならぬ。今裁縫科に對する好き嫌ひの原因の重なるもの丈上げて見ると、

「自分のものが自分で出来るから早く出来るから

よく出来るから

大人になつて必要だから

この頃針がよく動く様になつたから

先生の言はれる事がよくわかるから

早く上手になつて洋服を作るのが楽しみ

洋裁があるからすき

先生にほめられるから

今日までお母さんにして頂いた仕事で自分で出来るから

自分のものを作つて着られるから

妹のものを作つて着せるのがうれしい

ミシンが使へるから

拇指がよく動かないから

よく出来ないから

材料がそろへて貰はれないから

人よりおくれるから

好き

嫌ひ

途中であきてしまふから

ミシンの順番がなか／＼来ないから

よく出来る時は好きで出来ない時は嫌ひ

手がよく動かないから

直すのは嫌だから

早く出来ると好きでおくれると嫌ひ

中位

等である、この結果を見て嫌ひな點をなほす様にし好きな點をます／＼助長する様にして裁縫愛好の態度の養成を心がけねばならぬ。かくしてこそ將來家庭生活をなす子女をして健全なる家庭婦人たらしめる事が出来る。

家事科に於ても児童の自發的活動を重んじ常に實生活に適合させるために實習作業を多くし、作業の結果は之を實習帳に記入し、それに対する指導者、家庭の母等の批評をも記入します／＼児童が自發的に學習する様にせなければならぬ。

又新聞紙上に毎日のせられる家庭欄の記事は常に之を利用させ、實際生活の理解を深からしめ、常に家事的事項に注意をあたへさせたい。

教材選擇に於ても児童の生活に適した教材を特に考慮して取扱ひ、先づ児童をして家事に對する趣味を持たせる様工夫すべきである。

かくしてこそ將來の家庭生活を健全に營なましむるための基礎教育がほどこされと思ふ。かゝる意味に於て新教科書が昭和八年四月高一家事教科書が發刊され、昭和九年四月高一家事教科書教師用と高二兒童用教科書が發刊され事實上内容形式共に大改新が加へられて居り、それがため家事教育界に大なる活氣を與へた事はよろこばしい事である。

節約利用經濟的態度の養成 家庭經濟は一國の經濟に深い關係のあるものである。この家庭經濟をつかさどる一家の主婦特に日本の女性は經濟的思想に乏しいと言はれてゐる。こゝに於てこの科教育に於て節約利用經濟的態度の養成が必要である。この科に於て時間と勞力と物との節約利用を圖つて行く様に指導せねばならない。例へば裁方に於て如何なる裁方にすれば最も布を多く用ひずして出來上るか。如何なる地質のものを用ひれば經濟上よきか。平常着と晴着とでは如何に裁方の方法をかへるか、目下盛んに宣傳されてゐる廣巾物の裁縫の如き、或は又衣服材料について如何なる種類のもが最も良きか等數へ上ると種々ある。

我が國人が現今用ひてゐる衣服の種類及同種の衣服の枚數が非常に多い事は獨り衣服の限界價值を減少させるでなく、經濟上亦大いに考へを要する事である。之について朝日新聞紙上にかゝる記事が出てゐた。

箆筒に死藏されてゐる 不經濟な着ない着物

「季節に應じて何枚もありすぎる この機會に整理されては」

一軒の家に是非なければならぬと言ふ様な必要なものよりも、なくてすむといふ不必要な、どちらかと言ふ

と無駄なものが澤山あります。今回の様な風水害に出會つて、家の中が混亂してみると無駄なものが如何に澤山あるかと言ふ事がつくづく判ります。

特に無駄の多く目につくのは着物です。おそらく大阪の御婦人程着ない着物を澤山持つてゐるものは無いでせう。大阪に住んで見て驚いたのは御婦人達が季節と着物との關係について敏感過ぎる事です。例へば東京では夏物ならば普通の單衣地と盛夏用の絹とあればそれで十分に事足りるのですが、大阪では先づ普通の單衣地、少し暑くなつて平絹、それから絹ちりめん、盛夏には薄物といふやうに、着更なければならぬ様に心得てゐる様です。薄物をのぞいてはそれ／＼相當した羽織を着なければなりませんし、従つて帯には種類が有つて盛夏には單衣帶、それから絹の帶、次に袋帶、涼しくなりかけて普通の晝夜帶といふ様に季節による帯の變化があり、結局夏物だけで着物四枚、羽織三枚、帯四本といふ事になります。しかも之は訪問着丈ですから平常着や一寸した外出着などと數へて來ると夥しい數になります。同様に春秋の合着、冬の着物がそれ／＼同數丈あるのですから大變です。そして年々に新しい流行のものを買つて行くのですから、箆筒の中には二、三度より手をとほした事のない着物がぎつしりとつまつてゐるわけです。大阪の方はどんなに小さな家に住んでゐても、又食べるものを粗末なものを食べてゐても、着物丈はちゃんと數と種類とを揃へて持つてゐられる様です。世の中に何が不經濟かと言ふ事をして頂きたいものです。第一ひと夏に四種も着更へないでせい／＼二種類位にとどめると言ふ様に、不用になつた分は箆筒に約つておかないでどし／＼着るか、他のもの、たとへばどてらにするとか、布圍

の表にするとか、ものによつて洋服にするとか廢物利用をうんとやるとよいと思ひます。古くなつた着物で婦人服を作る事はこの頃方々で行はれてゐますが、なか／＼氣のきいたものが出来てゐます。(大阪女專教授佐賀ふさ子氏談)

これによつて考へて見るに、大阪丈でなく日本中の婦人は大體こうした傾向が多い。勿論人間はすべて美的生活をしたいと希望し、美的本能を持つてゐるのであるから、無下に流行をおひ新しいものをつくつて行くといふ事に對して浮薄だとか贅澤だと言ひ切る事は出来ない。流行も時代の反映であり、科學的立場より生れ来るもので、我々が社會人として生活して行く上には、衣服の流行に對してもよく意をはらはねばならないものである。いましむべきは虛榮に流れる事である。

なほ最近廢物利用の記事が家庭欄にのせられてゐるが、(例、冬の肩掛で女兒用ドレス。古いセルで吊スカート。おばあさんの長襦袢が婦人服に化けるアフターヌンドレス、單衣羽織でハーフコート等々)こうした事は非常に大切な事で、裁縫教持の折かゝる記事を子供に話してきかせる事は、自分もあの廢物の布でワンピースを作つて見やうと言ふ考へを起させる事となり、不必要なものはないと言ふ信念をいだかせる事となる。其の他家事上に於ても近年生活改善が盛んに叫ばれてゐるが、こうした生活を改善する基礎となる考へ方をしつかりうゑつけておく事が今後のこの科教育の重要強調點である。

清潔整頓の習慣と女性的態度の養成 清潔整頓の習慣は修身科に於て指導される所の徳目の一である。之の實地指

導をなすには家事裁縫科が最も適當である。

尋四になつて初めて裁縫する時に次の事は必ず心得として話す必要がある

- お裁縫する前には必ず手を洗ひませう。
- お裁縫用具には皆自分の名前をつけませう。
- 用具はよく整頓させよう。
- 時間の始と終りには必ず用具をしらませう。
- 折針や糸屑はよくしまつたませう。
- 運針用布は度々洗ひませう。
- 裁縫用具は定められた場所へ正しく置ませう。置場所が定つてゐないと仕事の能率に關係します。
- 裁縫用具の他に鉛筆、消ゴム、安全ピンはいつも裁縫箱の中に入れておきませう。
- 裁縫帳はいつも美しく記入し整頓しておきませう。

又家事科に於て家事の實習に當る以前に

- 頭髮のみだれを整へエプロンをつけて作業に當るに都合のよき態度をなす。
- 用具は適當の所に全部整へておく。

實習中は常に

今後の家事裁縫教育

○使つたものは機敏にかたづけろ。

實習後にも

○後始末 教室の整理整頓をなす。

○實習帳の整理。

○其他

等の仕事を徹底的にさせる時自ら清潔整頓の良習慣が養成される。

なほ作業中は、兎角口が留守なので大きな聲でしゃべり易い。質問研究のために話す事はよい事であるが、それ以外の事柄で話をする事は仕事の能率の上からも、學習態度の上から考へても良い事ではない。無言にて實習に當り、無我の境地で作業をなす様にせなければならぬ。

特に裁縫をなす折はこの注意の徹底が大切である。なほ裁縫室に在つては、疊の上の歩行は静かにする事。正しく坐る事。室内の出入を静かにする事。長上には先をゆづること。等々の女性的な態度の養成が必要である。近時子女の服装が洋服となり、ために動作が活潑となつた事はよいが、度が過ぎて亂暴となり、禮儀作法に對する觀念が次第に薄らぎつゝある折特に女性的態度の養成に注意すべきである。

(二) 日本的なるものへの創造

家事裁縫教育と國民生活 家事裁縫は家庭生活の基礎たる衣食住を對象内容とする營爲であり生活の單位たる家庭生活の主要部分を構成するものである。かゝる家事裁縫は單に一家庭内の營爲に止まるのみならず國民生活と深い關係のあるものである。次に生活の三基調である衣食住と國民生活との關係を考察する。

衣 衣は萬物中人間のみ所有するものであり、人生の進歩發達と略々並行して發達するものである。原始時代の木の葉獸皮等を以て身體を被ひし時より次第に發達して現代の衣服を構成するに至つたものである。衣は發達せる人間社會に於て片時も忘れる事の出来ないものとなつた。かゝる衣服の目的は衛生上の目的(身體の健康の維持)と容儀上の目的(各自の地位品格の保持、身體裝飾、美的感情の満足)にあり、文明の進歩するに従ひ後者が重要な問題となつて來た。即ち道徳的、藝術的方面の重視並びに更に經濟的、産業的にも深い關係を有する。經濟的産業的とは衣は財産であると共に物價又は産業品、即ち養蠶、製糸、農業、織物、染色、洗濯、裁縫等の商工業に關係する。

藝術的方面とは女子の衣が男子の衣より發達してゐること、藝術の隆盛な時、所には獨特の衣が發達する。道徳的方面とは國民性又は民族性の表現である。和服について見るに紋や羽織の裏や長襦袢や半衿の味ひは、到底日本人又は日本人の國民性民族性を知るものでなければ理解し得ない點である。

衣は又個性の表現である。衣の柄一つ色合一つ着こなし一つでこの着衣者の個性、人格、教養、思想、趣味を理解し得る。更に衣は社會生活上必須なものである。各人は衣類無くして他人と交際し得ない。若し然らざる場合は禮儀や風紀を紊すものとして非難されたり處罰されたりする。各々が衣服を整へるのも一つは自己の品位を整へるため

あり、他には自他相互即ち社会生活の健全を保たんがためである。衣は以上の如き意義を人間生活、人生の上に有する。(稻毛金七氏の説による。)この衣を構成するのが裁縫であり、その實力の養成が裁縫科の目的である。故に裁縫教育は人間生活の根本問題である。従来の裁縫教育は單に裁ち縫ひ、即ち技術が主となり、この技術を如何に上手に表現し傳授するかと言ふ事であつた。従つて衣服生活の發展國民衣服生活全體の向上に資する所は僅かであつたと思はれる。過去の國民生活が單純であり、文化の程度の低かつた時代より、現代の如き複雑な國家生活に至つた時は、衣の問題も進展し來り、流行は瞬時も止みなく、春より夏へ、去年より今年へと發展してゐる。かくの如く文明の進歩と共に國民生活も又之にならひ、隨つて國民の服装生活も亦著るしい變化を生じ來つた。

現代の我が國民の服装生活を見るに和洋の二重生活である。こゝに日本服として如何に統一するかの問題がある。

食 食は衣、住に比して必要の度が最も高く、眞に人生の不可欠的條件であり、それだけ本能的、個人的性質が多分に含まれてゐる。かゝる本能満足としての食が經濟、衛生、料理、會食、風習等を條件とする時忽ち之に人生的文化的意義が加味される。經濟問題としては食の國家生活に及ぼす點の如何に大なるかを周知の事實である。次に、日本人と肉食、西洋人の肉食、日本人と酒、ロシア人とウヅカ、ドイツ人とビール等を考へる時、こゝにも國民の食に於ける趣味嗜好が如實に國民性の上に表現されてゐる。

住 住はやはり人間獨特のものであると共に衣食に比して遙かに精神的にして社會的なものがある。その直接目的は身體の保護所であり財産である。がその本質はどこまでも精神的、社會的即ち道德的な所に有する。住は家庭生

活の本據であり、「住めば都」の語の如く、住に對して特殊の愛着をおぼえる結果、所謂郷土意識又は愛郷心の發動となり、やがて愛郷心の源泉となるものである。

住はこの他に藝術的、宗教的意義がある。家屋は一個の藝術品であり、建築は一種の藝術である。その他その内外に於て行はれる藝術的營爲、例へば室内裝飾によつてその藝術的價值を高める。更に、祖先の遺靈を守つたり葬祭を行つたりする場所として宗教的意義が有する。そして家族主義の我國家に於ては特にさうである。

この他、住は前述の如く、輕々しく改造がゆるされないために、其の建築或は定住の際には、相當慎重な考慮が要したり、斷えず掃除や手入れを必要としたり、更にその存在形態に於て社會的であつたりする點に於て、特に重大な意義を有するのである。住が家庭生活の本據であり、家庭が國家の基礎であると共に家庭以外の社會に諸多の缺陷が存するかぎり、我が國民は住に關して一層眞摯な見解を持たなくてはならない。そして之は食の問題と共に、其の解決を個人の自由に一任すべきではなくて、國家當局が指導の任に當るべきものである(稻毛金七氏の説による)。以上の如く衣食住は國民生活と深き關係を有するものである。家事裁縫の主内容が衣食住にある故に、家事裁縫教育は國民生活に深き關係を有し、よりよき國民生活の指導を念願するものでなければならぬ。

和式洋式の綜合 和式と洋式、新と舊の對立が家事裁縫教育上一大問題である。食に於ける和食洋食の對立、衣服に於ては和服と洋服、住に於ける洋館と純日本式家屋との對立、之等の指導に當りいづれを可としいづれを不可とするか。或は之等に對して如何なる點をその中心觀念として指導するかの問題が重大な事であり、こゝに私が之等を綜

合して眞に日本的なるものへの創造を目ざす創造的態度の養成を述べるゆえんである。

日本の衣服の創造

衣が發達せる人間社會に於て片時も忘れる事の出来ないものである事や、各個人の個性の表現であり人格のあらはれである事、社會人としての生活の上に必要なこと等は前述の如くである。今かゝる衣服が上代より現代まで如何なる條件を以て發達し來りしかを考察して見よう。

我が國古代より現代に至る衣服の變遷をみると衣服發展の目標は明らかである。

- 1、活動に適合した衣服
- 2、安易な衣服——(衣服の進歩による各人の生活様式は安易な方向へ、又出來るだけ輕快な様式を望む)
- 3、審美的な衣服

以上の1、2、の二條件を持つた衣服でも之を個人の衣服、自己の衣服として、完全に使用する事は出來ない。少くとも自己の衣服とするためには自分の趣味を考へる。社會人の衣服とする爲にはその時代の趣味をも考へねばならぬ。各人はそれ〴〵實用的要求以外に美的要求を有し、衣類を通じて自己の趣味性をも表現しようと努力してゐるものである。

衣服は以上の三條件を持つて歴史的につくり出され現在に至つたものである。かくの如き衣類は個人を物語ると同時に、國民性を發揮し又時代精神をも反映してゆく。統一した國民服の存在する事は、その國の民族性を表示するも

のであり、又國際的に見るならば國民としての威力、國民としての輝きをも表象し得るものである。従つて國家の存する限り一定せる國民服を持つ事が尤も望ましい。

我が國現代の服装界は、主として和服、洋服の二重が用ひられてゐる。こゝに過渡期の様相が見られる。

衣服の二重生活と言ふ言葉は既に度々きかされた問題であり、日本服の改良が叫ばれてから既に久しい時日を経過してゐる。

和服の美しさ優美さは國民性の表れであり、然も之は我が國の氣候、風土等の地理的原因によつて影響される所から之が如何に非活動的である點が有つても地理的條件や國民性をかへりみずして之を廢止すると言ふ事は出來ない。然し現在活動時に於ける服装として男子の服装は全部洋服になつてしまつた。現在の子供は和服の數より洋服の數がはるかに多數持つてゐる程、子供と洋服とはびつたりと一致する様になつた。後に残された中年以上の女子の服装が一體何處に落付くべきか。

和服は靜的特長を有して美しく休養時に適し、洋服は動的長所を有して活動時に適する事が出来る。衣服は單に活動のみに關するのではなく、衣服は住宅とも密接な關係を有する上から、現今の我が國家屋が、學校、ビルディング、衆會場その他の大家屋をのぞく外は主として日本式疊式である。こゝに於て座敷和風生活には和服が適當であり、椅子式洋風生活には洋服が適當である。又四季の變化のきびしい特に冬に於て建築様式の十分でない家屋の中には、洋服は不適當である。従つて座敷和風生活には和服を、他は洋服を着用する事とする事は現在の環境より適當である

と思ふ。然らば、所謂二重生活と言ふ事に對しては決して活動時にも和服洋服を、休養時にも和服洋服を着るのではなく、一日の生活の部面に於て適所適在の原理による使ひわけをすべきであり、又それが最も賢明な方法であらう。然し現在の子供にして、殆んど洋服一つで成長しつゝある女兒が將來の日に於ては、建築様式も次第に變化を來すであらうし、今より更に洋服着用者が増して來る事と推察される。こゝに現在の日本服をして將來の日本服たらしめる改良が必要である。

我日本に於ける現在洋装のデザインは主として外國のスタイルブックより採取してゐる。骨格、容貌の異なる外國人のデザインが小柄な日本婦人に不調和である點のあることは申すまでもない。

日本婦人が日本の衣服として洋装の常識をたかめ、日本的洋装としてつくりたいものである。

日本特有の材料と日本の國民性にと適合した形式によつて日本情緒を發揮し、世界的日本服としての價值ある日本服を作り出す様、創造的態度を有する兒童を教養する事がこの科教育の重要點であらう。

食物に於ての問題は現代の衣服生活程に之等の選擇には困難を感じてはゐない様に思ふ。然し我々は食の生活に對し、和食洋食にしろ、如何なる點に根本的視點を置いて之等を食し、又學校に於て教授に當るべきかの點を考へねばならぬと思ふ。

なぜならば食物が人間の身體の榮養を支給し活動能力を與へるものであり、國民保健上重大問題であるからである。我國に於て乳兒死亡率の多い事は、榮養不良の母から生れ出づる子供が多く、又結核による死亡の大なる事はその

一原因として榮養の不良が上られてゐる。かゝる事を知る時食物の調理に對して榮養上完全なものであるか、いづれへか偏食いたしてはゐないかと言ふ事を考へてみなければならぬ。

最近我國に於ても國立榮養研究所が設立され盛んに研究されつゝあるが、如何に美味美食も榮養學上より考へる時完全なものでもなく、榮食主義の所謂粗食と言はれるものも、決してその効果は美味美食におとるもので無い事も、榮養研究の結果明らかにされた所である。

要は合理的な調理法こそぞましいものであり、又それは經濟上の點にもかなつた所のものである。かくの如き榮養を本位として今後の食の生活をみなほして見る必要がある。なほこゝに附記すべき事は「榮養一天張りでは吾々の食は満足出来ない。やはり従來の如く嗜好の點をかけてゐては十分なものではない。」と言ふ事をきくのであるが、榮養本位と言つても、やはりその嗜好の點をかへりみ、兩方の満足された所の獻立をこそ我等は望んでゐるものである。たゞ従來の食物がその質をかへりみず、嗜好の點に走りすぎた感がある點より、今後は榮養を本位として和食洋食いづれもかゝる觀念のもとに選擇されなければならないと思ふものである。

かゝる點に立つて食物の指導に當る時、たゞ新しい西洋料理の指導を以て事たりとする丈でなく、従來から日本にある所の「飯に味噌汁」の研究から一般家庭生活に必要な日常食に至るまで、之が改善に對して、學校に於てこそ科學的に研究され指導される必要がある。學校の食物料理の指導は名も知らない新しい料理の紹介のみおはつてはならない。

一國の國民保健の上からも國民經濟の上からも營養學の教ふる所により、調理法に、献立の上に、種類の上に、和洋の料理をして眞の日本の食物となすべく指導に當る必要があると思ふものである。

次に住宅については如何なる態度、考へを持たねばならぬかについて考へてみ様う。

教師用五十六頁、兒童用第十一課で住宅について三時間教へる様になつてゐる。國定教科書の兒童用に於ては「住宅は土地の状況や住む人の事情によつて、いろ／＼違ふところの有るべきは勿論であるが……」とのべて、貧富の差の考慮をなし、如何なる家にも一般に望ましい主なる點は、衛生的である事をのべてゐる。日當りや風通しがよく、寒暑が避けられ、事情がゆるさぬ時は、せめて家族の居間だけでもかくあらせたい……と言ふ家族中心主義の考へを入れてゐる。特に日當りの良否は國民健康に大なる關係を及ぼすものである點から、和洋いづれの家の建設にも大いにこの點を考慮すべきである。

従來の日本住宅の建方を見ると、道路と言ふものを相手として、道路に對してどうむけるかと言ふ事に重きを置き過ぎて、太陽に對する向きを考慮に入らざる事が少なかつた。かゝる事情をよく話す事によつて、全國の兒童が、やがて自分が家をたてると言ふ場合に至つた時、日本の住宅關係から生ずる健康が大いに改善せらるゝであらうと思ふ。

最後に「住宅に關する是等の主要點を等閑視して、徒らに外觀の美、用材の粹を誇るが如き習慣は本末を誤つたものと評すべきである」と記されてこれに對する意氣込を表してゐる。(近藤耕藏氏の講演による)

こゝに私達住宅教授はかゝる國民の健康を念願する日本住宅が將來建設される様指導したいものである。

創造的態度の養成 以上の如き日本的なるものを創造する任務が家庭婦人の任務であり、かゝる女性の養成はこの科の教育に待たねばならない。こゝに今後の家事裁縫教育上の一重要點として創造的態度の養成を上げるわけである。常に兒童をしてよく考へさせ、よく見させ、疑問を持たせる事により、より高きものを創造する態度の養成が必要である。

今後の日本教育はこの和と洋とを綜合して、そこに新なる日本的なものへの創造をなさしむべき指導と態度の養成が必要である。

(三) 國民生活を統一原理とせる家事裁縫教育

裁縫科に於ける服裝指導 服裝生活が人間生活の存在する限りその生活の一部面である點より、裁縫科に於ては裁縫ひにとゞまらず服裝生活を指導せなければならぬ。

我々の服裝生活が經濟的、審美的、社會的、衛生的の方面に關係のある事は前項の國民生活の所でのべた所である。之が指導は、服裝生活についての知識そのものと、之を把握する精神の作用に注目せねばならぬ。

衣服の性質、構成上の理論と之が製作上の諸知識、使用の方法から、進んでは衣服及び之が材料の生産過程、その經濟價值、販賣上の事柄から購入上の注意まで及ぶべきである。要するに衣服に對する兒童の見識を養はなくてはならない。

かくの如き内容を會得する方法として兒童の心理は様々の活動をなすものであるが、その結果的内容を把持するばかりでなく、心理作用そのものを練磨する事が出来る。即ち觀察力の養成である。種々の衣服及び之が材料を取扱ふ事によつて觀察力は一層洗練され、視覚・觸覺等の感覺が鋭敏になると共に、物體の形及大きさの知覺が正確となる。この觀察力の養成は他の教科と同様裁縫科に於ける大切な目的である。

次に服装についての鑑賞をなす事である。鑑賞は裁縫科が藝術教育の一部分を擔當するものとして忘れてはならない所である。時代の進歩は服装美の急激なる發達をうながし、之に對する正當な判斷力と鑑賞力とは服装生活指導上緊要の方面となつた。衣服についての美的情操を正しく導く事は一方衣服製作・衣服處理に必要であるし、服装の如何はやがてその人の趣味人格の表現であるから、優美・高尚なる人格を養成する上に服装美についての陶冶はかくべからざる事柄である。

故に裁縫科に於ては國民衣服を構成し、國民衣服として色・柄の選定の指導、流行に對する批判眼と、よりよき國民衣服の製作をもつて國民生活を統一させるべく指導が必要である。

國民生活を統一原理とせる家事教育 現時に於ける家事教授の實際を見れば、教材の研究は十數年の過去に較べて科學化され、之を實際生活上に運用する方法は社會化されて來た。しかしなほ社會化、現代化が一家庭の利益のみ考へた缺點がある。

國家組織のもとに、社會生活をなす我々の家庭は自家の利益のみを目的とした生活行爲では、たうてい十分でない事、その目的を完全に達成する事は出来ない事をしらねばならぬ。

今例を住居關係にとれば、下水の掃除の指導に於ては毎日々水溝を竹箒にて搔立てながら、清水を上流より下流に流しつゝ洗へと指導するにとゞまらず、石油乳劑等により殺菌殺虫、消毒劑の撒布を指導する事は、前者が一家庭の利益を考へるとゞまるに比し、後者は社會衛生上合せて自家生活の幸福上大なる事である。

衣服に於ては廣巾物の使用並に洋反物に於ける如く身長の大小によりて必要なる長さ丈け買求める事は、ひいては國家經濟に多大の價値へ持つものである。

食に於ては人口食糧問題等にも關心を持ち指導する事は重要事項である。

その他養老、育兒、家事經濟、家庭管理の各部門に於てかゝる國家的見地に立つて指導をなし實生活の改善をはからねばならない。(主として石澤吉麿氏の家事教材研究による) 今後の家事裁縫教育は、その一方面として國民生活の善導を念願とすべきである。

第五章 教師 論

最近家事裁縫教育をして女子教育の中心たらしめよとの説がある。家事裁縫教育は、家庭生活の處理をなし家庭に於て國家の文化に貢獻し得る眞に自覺ある女性の養成を念願すべきである。之がためにはこの教育に當る指導者が、

今後の家事裁縫教育

學科に對する學問及び技術に關する精確なる知能の所有と、その教授に對する正當な方法の理解と、子女の心理に通曉する事が必要であるが、更にそれよりも根本の問題は、この科の現代に對する眞意義の把握者であり、この指導によつて彼等の將來の生活を如何に善導し得るかを自覺せる者であらねばならぬ。

家事裁縫は一方に於ては理論的根據の上に立たねばならぬ教科であると共に、他方には方法的、技術的要素を最も多く有する教科である。従つてこゝに各方面に對し大いなる修養が必要である。

女子は一家の家庭生活をよく理解し、調和し、向上せしめる事によつて、はじめて我が國民たる義務をつくすものであるから、この科の指導者は十分な自覺信念、精神的態度を以て常に兒童にのぞみ、眞に女性の天識の念の自覺の喚起に努力すべきである。

この科は一藝一能の指導に止まらず、次代の女性をして日本婦人たる眞使命を覺醒せしめ、合せて將來に於ける家庭の向上、社會の改善をも企圖する意氣と決心を持つて之に當るものでなければならぬ。

家事裁縫の教育は、實に家族のため子女のために一身を犠牲にして厭はざる日本婦人傳統の精神を育成する所の女子にとつて、重大なる使命を持つ教科である。

以上各章に論ぜし事項は、かゝる教育のための一端にすぎないが、この使命の遂果は教師の力に待つものであると論じて結論とする。

昭和九年十二月五日印刷
昭和九年十二月十日發行

【定價金貳圓八拾錢】

高丁紙子は何時
にても取替ます

著者

京都府師範學校附屬小學校

京都市中京區二條通河原町東北角

合資會社 政經書院

發行者

代表者 田村敬男

印刷者

京都市下京區櫛笥通五條下ル
定池由太郎
電話 下一五六六番

12.12
發兌

京都市中京區二條通河原町東入
合資會社 政經書院

電話 五〇四番
電話 一五七五番
電話 一六二六番

263
398

終

